

平泉文化研究年報

第21号

令和3年3月

岩手大学
岩手県

序

岩手大学と岩手県は、「平泉文化研究機関整備推進事業」により、平泉文化研究に必要な、研究者相互の連携や多角的・学際的な研究の推進を図るための共同研究など、研究基盤の整備と拡充に取り組んでまいりました。

共同研究は、岩手県が策定した「平泉文化の総合的研究基本計画」(第3期)に基づくもので、令和2年度から令和6年度までの5カ年で、岩手大学と岩手県が2つのテーマで共同研究を行うこととしております。

岩手大学は「平泉文化研究センター」を、岩手県は「平泉遺跡群調査事務所」をそれぞれ設置し、平泉文化の研究を進めてまいりました。この間、平成18年度からは、平泉文化に係る総合的な研究とフォーラムを共同で行い、平成25年度には平泉遺跡群調査事務所内に共同研究サテライトを設置するなど、相互に研究の連携を図ってきたところです。

本「平泉文化研究年報」は、平成12年度から刊行を継続しておりますが、今後も5カ年にわたる共同研究の成果を順次発表し、本年報が平泉文化の研究を進展させる一助となるよう努めて参ります。

最後に、共同研究への御理解と御協力をいただいた関係機関に深く感謝を申し上げます。

令和3年3月

岩手大学
岩手県

目次

I	研究報告	
	研究報告 1-1 「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」	2
	仏教の視点から見た隋唐洛陽城宮城の空間構造	
	－ 隋から則天武后期を中心として－	
	劉 海宇（岩手大学平泉文化研究センター 教授）	
	研究報告 1-2 「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」	18
	奥州藤原氏の「拠点づくり」の考え方とその影響	
	－ 東日本地域を中心として－	
	大道 篤史（岩手県教育委員会 生涯学習文化財課 柳之御所担当）	
	戸根 貴之（岩手県文化スポーツ部 文化振興課 世界遺産担当）	
	研究報告 2 「学校教育における世界遺産の教材化についての研究」	26
	今野 日出晴（岩手大学教育学部 教授）	
II	平泉文化の総合的研究基本計画（第3期）	41

	第1回平泉学研究会・第1回平泉学フォーラム実施報告	52

例言

1. 本書は、岩手大学と岩手県が共同で実施した研究の成果をまとめたものであり、その成果については両者が等分に保有している。
2. 共同研究計画は、両者が協議のうえ策定しているが、研究活動に要する経費については、岩手県が岩手大学に対して負担したうえで執行している。
3. 本書の編集は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課が行った。

I 研究報告

研究報告 1-1 「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」

仏教の視点から見た隋唐洛陽城宮城の空間構造

—隋から則天武后期を中心として—

劉 海宇

隋の煬帝によって造営された東都洛陽城の宮城は、その南北軸のずれが仏教聖地の龍門（伊闕）の方角に合致するために生じており、都市計画に仏教的要素が取り入れられたと考えられる。則天武后期では伝統の「前朝後寝」基本的空間構造が大きく改造され、「後寝」の寢殿生活区・「前朝」の朝殿行政区と宮城南北軸終点にある仏教の聖地龍門という三者を理想郷とする仏教的宇宙観が伺える。

はじめに

奥州藤原氏の政治・行政拠点としての平泉が、東・北アジアにおいて独特の位置にあることを明らかにするため、東・北アジアにおける前近代の政治都市（拠点）の成立過程及びその構造を検討し、関連する文献及び考古資料の精読に基づいて整理したうえで、12世紀における平泉との比較研究を行うことが必要であり、2020年度から岩手県と岩手大学との共同研究が発足された。本年度は、特に仏教的理想世界の具現化における関連施設の役割を明確化するため、中国隋唐洛陽城における宮城の空間構造（隋から則天武后期を中心として）について、仏教の観点から関連資料を調査と整理して、考えることにした。

1 隋洛陽城の宮城の造営とその仏教的要素

○隋洛陽城の造営とその特徴

隋の東都洛陽城は、函谷関以東及び江南地区の統制の強化のため、煬帝によって大業元年（605）からその造営が開始された。煬帝は、同年三月に「洛邑は古よりの都、王畿の内、天地の合するところ、陰陽の和するところなり。控ふるに三河を以てし、固むるに四塞を以てし、水陸もて貢賦等を通ず。（中略）いま伊、洛に於いて東京を營建すべし（洛邑自古之都、王畿之内、天地之所合、陰陽之所和。控以三河、固以四塞、水陸通貢賦等…今可於伊、洛營建東京）」（『隋書』煬帝紀）という詔書を下し、建設をはじめ、翌年春正月に完成したという。『隋書』食貨志によれば、徴発された労働力は、毎月200万に達したという。

洛陽城の設計理念について、『新唐書』地理志に「都城は前に伊闕に直し、背に邙山に拠り、左瀍右澗にして洛水その中を横貫し、以て河漢に象る（都城前直伊闕、後拠邙山、左瀍右澗、洛水貫其中、以象河漢）」とあり、東西に貫通している洛水が天の川になぞらえられたという（図1、

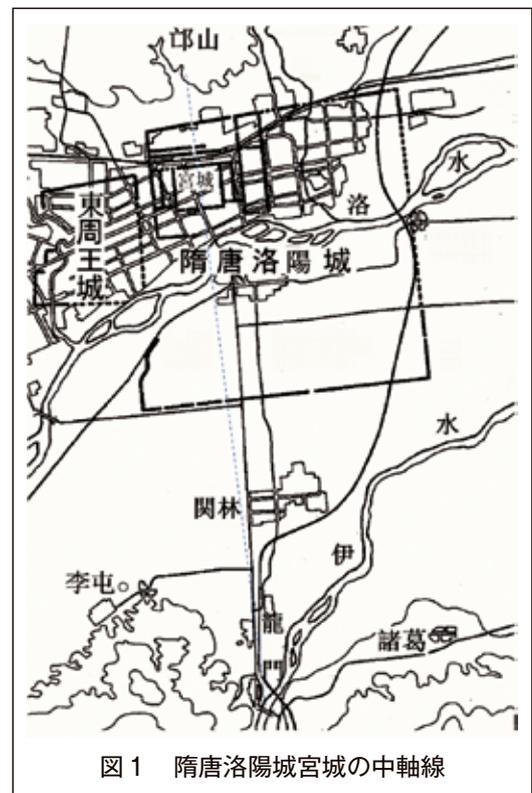


図1 隋唐洛陽城宮城の中軸線

中国社会科学院考古研究所2014：2の図に加筆）。秦の都城咸陽における設計思想として、「渭水都を貫

き、以て天漢に象る（渭水貫都、以象天漢）」（『三輔黄图』卷二）とあるため、その伝統を継承したと考えられる。ただし、縦軸としての南北中軸線は少しずつずれが生じ、伝統都城の中軸線原理と違いがある。そのずれは、宮城の中軸線のずれから生じるもので、宮城の設計思想とその原因を次節で検討する。

隋唐洛陽城の構成：郭城・宮城・皇城・東城・含嘉倉城等。現在確認できる規模：外郭城北壁6,138m、東壁7,312m、南壁7,290m、西壁6,776m、面積は隋唐長安城の半分強（中国社会科学院考古研究所2014：29）。

隋唐長安城と比較し、洛陽城は以下の特徴をもつ。①洛水が城内を東西に走りぬけ、洛水につながる水渠が城内に縦横交差；②西北部の高台に宮城・皇城が偏在、宮城の中軸を龍門（伊闕）の方角に合わせるため南北軸のずれ；③宮城の防御的構造の優越性など（図1）。その理由は、自然地形の制約、政治と経済的目的、水運の便利・思想的造営理念（洛水を天の川になぞらえる）、宮城・皇城及び穀物倉の含嘉倉などが西北部の高台に造営されたなどが指摘されている（妹尾達彦1997）。

○隋唐洛陽城宮城とその中軸線建築

宮城とは、都城の中で天子の居住区域のことである。隋唐洛陽城の宮城は、その北西部に位置しており、東西壁の長さ2,100m、南北壁1,840～2,160m、大内・東西隔城・東西夾城・玄武城・曜儀城・圓壁城からなる（図2、中国社会科学院考古研究所2014：341）。

『元和郡県図誌』巻五に「其の宮は北に邙山に拠り、南に伊闕の口に直し、洛水都を貫き、河漢の象有り（其宮北拠邙山、南直伊闕口、洛水貫都、有河漢之象）」とあり、隋の煬帝が邙山に登り、南の龍門（伊闕）を眺めて南北軸のずれをもつ宮城の中軸線を決めたという。龍門とは、山の谷あい伊水が流れ、岸を挟んで対峙する門闕のような龍門山の形状のことで、また伊闕と呼ばれた。古典に、伊闕は伝説の帝王大禹によって開削されたもので、それによって氾濫した洪水が収まり、天下が安定したという（『呂氏春秋』貴因篇・『説苑』貴徳篇・『淮南子』等）。また、伊水兩岸の崖壁に、北魏時代から切り開かれた龍門石窟群があり、仏教の聖地である。すなわち、隋の洛陽城の宮城は、北の邙山より、玄武門－大業殿－大業門－乾陽殿－乾陽門－永泰門－則天門と続く建築が中軸線に存在しており、この中軸がさらに南へ洛水を渡り、大禹治水や仏教の聖地の龍門へと続くのである（図1）。隋の煬帝が、天台宗の開祖智顛に帰依するほど、仏教の篤信者である。龍門を宮城の中軸線の終点にすることは、龍門石窟群を理想郷とするという仏教的世界観が伺えるだろう。

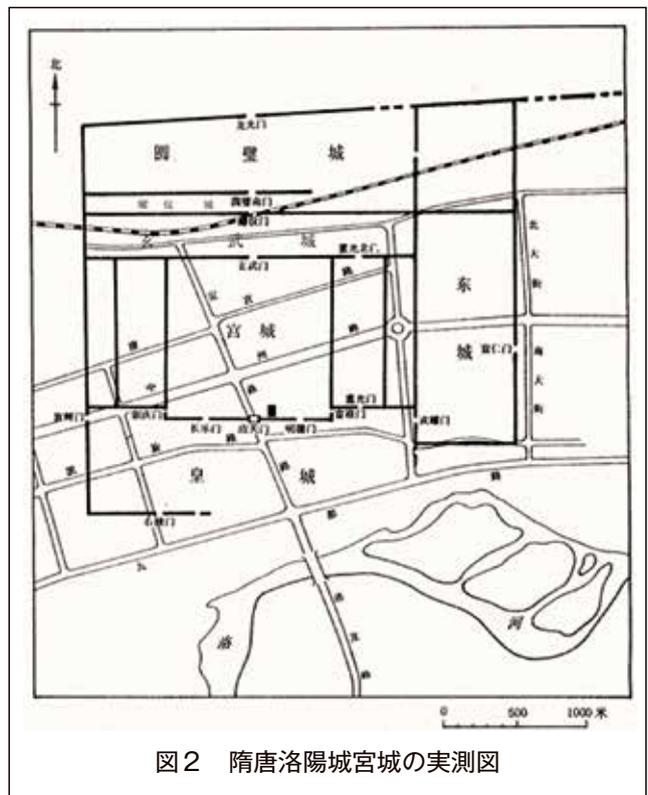


図2 隋唐洛陽城宮城の実測図

○隋唐洛陽城の内道場

内道場とは、「宮中において仏道を修行する所。（中略）内寺」（『広辞苑』）のこととされている。隋唐時代における内道場は、宮中における仏道の「修行」する場だけではなく、時には仏典の訳場及び国家的宗教統制の行政機関でもあり（陳金華2019）、おおよそ宮城内及び禁苑の中に位置している。

隋洛陽城の宮城に慧日・法雲の両道場が存在した。最初、開皇十九年（599）楊広（後の煬帝）は江都（揚

州)で両仏教道場を造営し、606年東都洛陽の宮城に移した。『続高僧伝』に「隋東都内慧日道場」の僧として敬脱・智脱・法澄・道莊・法論・立身・智果等の伝があり、また志寛法師も「既に慧日に処り、講悟相仍かさなる」と見える。『大業雜記』によれば、両道場は洛陽宮城の南西部にあり、光正門と隆慶門の間に位置するという。

また大業二年(606)、禁苑の上林苑に翻経館が設置された。『続高僧伝』達摩笈多伝に、「(煬帝)すなわち勅を下し、洛水南浜上林苑のうちに於いて、翻経館を置き、翹秀を捜挙し、永鎮して伝法せしむ(乃下勅於洛水南浜上林苑建翻経館、捜挙翹秀、永鎮伝法)」とある。

仏教の視点から隋洛陽城宮城の都市計画をどう捉えるか考えると、そこに仏教的要素をもつ点は、(1)都市計画基準線の終点が仏教聖地龍門である点、(2)宮城内に内道場として慧日・法雲の両道場を設置する点、(3)禁苑の上林苑に翻経館が設置された点等である。隋の煬帝は、天台宗開祖の智顛に帰依するほどの熱心な仏教信者であるため、洛陽城の都市計画に仏教的要素を取り入れるのがむしろ自然なことであろう。その都市プランに、宮城の空間を現世の世界とし、中軸線の終点となる龍門石窟を理想郷とするという仏教的世界観による影響が伺えるのであろう。

2 唐高宗期における洛陽城の宮城

○唐高宗期における洛陽城の宮城再建

隋末の戦乱により、洛陽城の宮城は破壊されており、唐太宗のときに「洛陽宮」と称されたが、再建されなかった。高宗皇帝は、顯慶二年(658)から洛陽城を東都として位置づけ、隋の宮城の空間構造を継承しながら、その中の建築等を全面的に改修・増築した。

高宗期の宮城の中軸線に位置する建築は、南から応天門－乾元門－乾元殿－燭龍門－貞観殿－徽猷殿－玄武門と続く。おおまかに二つの区域に分かれており、応天門から燭龍門までは朝殿行政区、燭龍門から玄武門までは寢殿生活区である。いわゆる伝統の「前朝後寝」制度に従っていた基本的空間構造がうかがえる。弘道元年(683)十二月に、高宗皇帝は、洛陽城の宮城の貞観殿(隋の大業殿)に崩御したという(『新唐書』高宗紀)。

○唐高宗期における洛陽城の内道場

『貞元新定釈教目録』によれば、「顯慶二年(657)春二月、洛陽宮に駕幸し(玄奘)法師と仏光王駕前にして発し、翻経僧五人を併せ、弟子各一を陪従せしめ、事事公給す。既に到れば積翠宮に安置し、大内麗日殿に召し入れ、観所縁等論を翻す。夏四月、車駕明德宮に避暑し、法師もまた陪従し、飛花殿に安置し、大毘婆沙等論を訳す。五月、法師積翠宮に帰り翻訳するを勅す(顯慶二年春二月、駕幸洛陽宮、法師與佛光王駕前而発、并翻経僧五人、陪従弟子各一、事事公給。既到安置積翠宮、召入大内麗日殿、翻観所縁等論。夏四月、車駕避暑於明德宮、法師亦陪従、安置飛花殿訳大毘婆沙等論。五月、勅法師還於積翠宮翻訳)」という。この文章によれば、玄奘法師は洛陽大内の麗日殿で訳経し、その後、宮城の西に広がる西苑(隋の上林苑)の積翠宮・飛花殿に滞在したという。言い換えれば、高宗皇帝は、宮城や禁苑の宮殿を内道場として、高僧を安置して訳経させたりしていた。

また、龍門石窟萬仏洞の永隆元年(680)の刻銘に洛陽「内道場運禪師」の名が見えており、「大監姚神表」と共同で「天皇・天后・太子・諸王」のために一万五千体の仏像が造られた。この「運禪師」が内道場で供奉した尼僧の智運であるという(曾布川寛1988:299)。

高宗は、東都洛陽城の宮城を大きく改修・増築したが、基本的に隋の宮城の空間構造を継承した。すなわち宮城の空間を現世の世界とし、中軸線の終点となる龍門石窟を理想郷とするという仏教的世界観をも受け継いだと言えよう。

3 則天武后期における洛陽城の宮城と仏教的改造

高宗皇帝に改修・増築された洛陽城の宮城は、則天武后期には神都の宮殿区域として仏教的に大きく改造され、長らく繁栄した。

○武周革命とその思想的根拠

武周革命とは、載初元年（690）に則天武后が唐王朝を中絶させ、皇帝となって国号を周と改め、大周王朝を創立したことである。その思想的根拠は『大雲經疏』と『宝雨經』であるとされている。『旧唐書』薛懷義列伝に、僧侶の薛懷義らが内道場において念誦し、また「大雲經を造り、符命を陳べ、則天これ弥勒の下生にして、閻浮提の主を作し、唐氏まさに微かなるべしと言う。故に則天革命し、周を称す（造大雲經、陳符命、言則天是弥勒下生、作閻浮提主、唐氏合微。故則天革命稱周）」とあり、ここにいう『大雲經』は『大雲經神皇授記義疏』の略で、東晋時代の曇無讖に訳出された『大雲經』（『大方等無想經』の別名）の義疏（解説）のことで指摘されており（アントニーノ・フォルテ1984）、現在一般的に『大雲經疏』と略す。『大雲經疏』は、載初元年七月に成立し、大雲が甘雨を降らして地を潤すように、また母が子を養育するように、神皇（則天武后）が天下に君臨することを説く。また、釈迦が浄光天女に対して予言し、「即ち女身を以て当に国土に王すべき者は、所謂聖母神皇是なり（即以女身当王国土者、所謂聖母神皇是也）」、「弥勒は即ち神皇の応なり（弥勒即神皇之応）」などとあり、則天武后を下生の弥勒仏と説く。同年九月九日、則天武后は登極して国号を周と改め、天授に改元した。尊号を「聖神皇帝」とし、息子の睿宗を「皇嗣」に降した。『宝雨經』は、長寿二年（693）九月に成立したもので、女帝が転輪聖王として君臨、弥勒仏の下生として寿命が無量となることを説く（大西磨希子2017：368-375）。

則天武后は、載初元年（690）に「聖神皇帝」の尊号で登極し、その後、長寿二年（693）に「金輪聖神皇帝」、証聖元年（695）に「慈氏越古金輪聖神皇帝」、また同年に「天冊金輪大聖皇帝」などと号し、尊号を目まぐるしく変更した。その目的は、自分こそが弥勒下生であり、また転輪聖王でもあることを強調するためであろう。大西磨希子氏は、則天武后は「転輪聖王と言う理想的な王者のなかでも最も優れた金輪王であると同時に、この世に下生した理想郷を実現する弥勒仏が応化した存在」と指摘した（大西磨希子2017：396）。

○明堂

明堂とは、受命の帝王のみが建立できる建物、「上円下方」の様式とされるもので、祖先祭祀・朝見の場（正殿）でもある。太宗と高宗の時に、その建立について議論されたが、創建できなかった。則天武后は、垂拱四年（688）に洛陽城宮城正殿の乾元殿を解体して明堂を創立した。この明堂について、『旧唐書』礼儀志に「凡そ高さ二百九十四尺、東西南北各おの三百尺。三層有り（中略）木を刻みて瓦と為し、夾紵もて之を漆す。明堂の下に鉄渠を施し、以て辟雍の象と為す。萬象神宮と号す（凡高二百九十四尺、東西南北各三百尺。有三層（中略）刻木為瓦、夾紵漆之。明堂之下施鉄渠、以為辟雍之象。号萬象神宮）」と記されている。明堂は、儒教の伝統コンセプトによって創建されたが、その建立監督者が僧侶の薛懷義であり、またそこで常に仏事や法会などが行われることから、明らかに仏教法堂の性格をもち、「萬象神宮」の別名もある。

たとえば、『旧唐書』礼儀志に、載初元年（690）二月、則天武后は「また明堂に御し、大いに三教を開く。内史の邢文偉、孝経を講じ、侍臣及僧・道士等を命じて次を以て論議せしめ、日昃に乃ち罷む（則天又御明堂、大開三教。内史邢文偉講孝経、命侍臣及僧・道士等以次論議、日昃乃罷）」と見えており、儒・仏・道三教の高位者達を明堂に集めて討論を行なわせたという。長寿二年（693）九月に、則天武后は明堂で「金輪聖神皇帝」の尊号を受け、朝議するたび転輪王の七宝を陳設した。七宝とは、『弥

勅下生成仏経』に見える「金輪宝・象宝・馬宝・珠寶・女宝・主蔵宝・主兵宝」のことであろう。また、天冊万歳元年（695）正月、明堂で無遮会を行い、深さ五丈の穴を掘り、そこから仏像を引き出して地下より涌出したという（『資治通鑑』巻205）。長安五年（705）正月に、岐州の法門寺から仏舎利を迎え、東都洛陽の明堂で供養した（『唐大薦福寺故寺主翻経大徳法蔵和尚伝』）。

明堂は、證聖元年（695）正月に仏寺天堂の火災からの延焼によって消失されたが、翌年に再建された。1986年、明堂遺跡は発掘され、その基壇が八角形、東西54.7m、南北45.7mとなる。基壇は、心柱構造の遺構で、口径9.8m、深さ4.06m、焼かれた痕跡が残り、底部に礎石が敷かれている（中国社会科学院考古研究所2014：481-482）。

○天堂（仏光寺）

天堂は、則天武后によって建立された仏教建築であり、洛陽城宮城正殿明堂の北西に位置する。その建立監督者は、明堂と同じく僧侶の薛懐義である。大仏を安置するための建物であり、『旧唐書』礼儀志に「また明堂の後に天堂を造り、以て佛像を安ず。高さ百余尺（又於明堂後造天堂、以安佛像、高百余尺）」と記されている。『資治通鑑』巻204と巻205にやや詳細に記され、「また明堂の北に天堂五級を起し、以て大像を貯ふ。三級に至れば、則ち明堂を俯視するなり。（中略）太后、僧懐義を命じ、夾紵大像を作らしめ、其の小指の中になお数十人を容れ、明堂の北に天堂を構へて以てこれを貯ふ（又於明堂北起天堂五級以貯大像、至三級則俯視明堂矣。（中略）太后命僧懐義作夾紵大像、其小指中猶容數十人、於明堂北構天堂以貯之）」とある。則天武后の「弥勒下生」の世論操作から、天堂に安置された乾漆像の大仏は弥勒像と推定されており、その高さが30m余りに達したとされている（羅世平2016）。前述した『資治通鑑』によれば、天堂は、高さ294尺の明堂より遥かに大きく、五階建てとされているが、おそらく五重塔の構造になると思われる。證聖元年（695）正月に火災で焼失、再建はなかったが、その場所は仏光寺になった。

1977年から1980年まで天堂遺跡は発掘され、金銅の造像記や『法華経』見宝塔品の刻経残石などが出土した（図3、洛陽市文物考古研究院2016：31・69-72）。

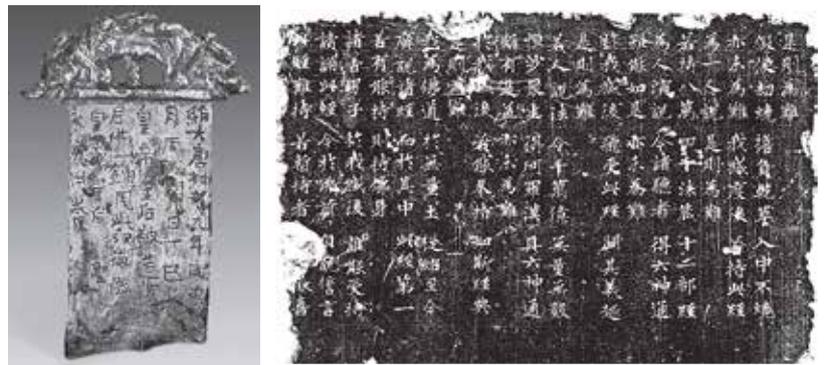


図3 天堂遺跡出土の金銅造像記と刻経残石の拓本

金銅の造像記に「維大唐神龍元年歲次己巳四月庚戌朔八日丁巳、奉為皇帝皇后敬造釈迦牟尼佛一鋪、用此功德、滋助皇帝皇后聖化無窮、永充供養」記されており、神龍元年とは長安五年のことで、則天武后が正月に退位し、中宗皇帝が即位して「神龍」に改元した。四月八日に釈迦の誕生を祝う灌仏会が行われ、造像記が供養されたと思われる。刻経残石は天堂遺跡の上に建てられた二号建築址から検出され、柱の礎石に転用された。天堂七宝塔の外壁に嵌め込まれた刻経石と推測される（劉海宇2019）。同じく刻経石で装飾される事例として、杭州雷峰塔の遺跡からも出土している（浙江省文物考古研究所2005：40-65）。これらの遺物は天堂の性格を示す。『法華経』見宝塔品に「爾の時、仏の前に七宝の塔有り、高さ五百由旬、縦広二百五十由旬にして、地より涌出し、空中に住せり（爾時佛前有七宝塔、高五百由旬、縦広二百五十由旬、従地踊出住在空中）」とあり、また『大雲経』にも王位を継いだ王女増長が七宝塔を建立するとある。天堂は『法華経』等の仏典に見える七宝塔であり、則天武后こそが四天王宮・三十三天を統治する女帝であることを宣言する装置でもある。

則天武后は、洛陽城の宮城における伝統の「前朝後寝」基本的空間構造を大きく改造した。「前朝」の正殿乾元殿を仏堂の性格の明堂に改築し、またその後ろに弥勒大仏を安置する天堂を建立した。すなわち、「後寝」の寝殿生活区を現世の世界とし、「前朝」の朝殿行政区を仏教的理想郷の空間として改造したと考えられる（図4、洛陽市文物考古研究院2016：5より加筆）。さらに宮城中軸線の終点に仏教の聖地龍門山を信仰の山とし、この三者を理想郷とする仏教的宇宙観が伺えるだろう。

おわりに

煬帝によって創建された隋東都洛陽城の宮城は、その中軸を仏教聖地の龍門（伊闕）の方角に合わせるため南北軸のずれが見られ、都市計画に仏教的要素が取り入れられており、その都市プランに、宮城の空間を現世の世界とし、中軸線の終点となる龍門石窟を理想郷とするという仏教的世界観が伺えると思われる。唐代初期の高宗期には東都洛陽城の宮城を大きく改修・増築したが、基本的に隋の宮城の空間構造を継承した。則天武后が帝位につくため、当時民間に広く深く浸透していた仏教を利用する場として、洛陽城の宮城における伝統の「前朝後寝」

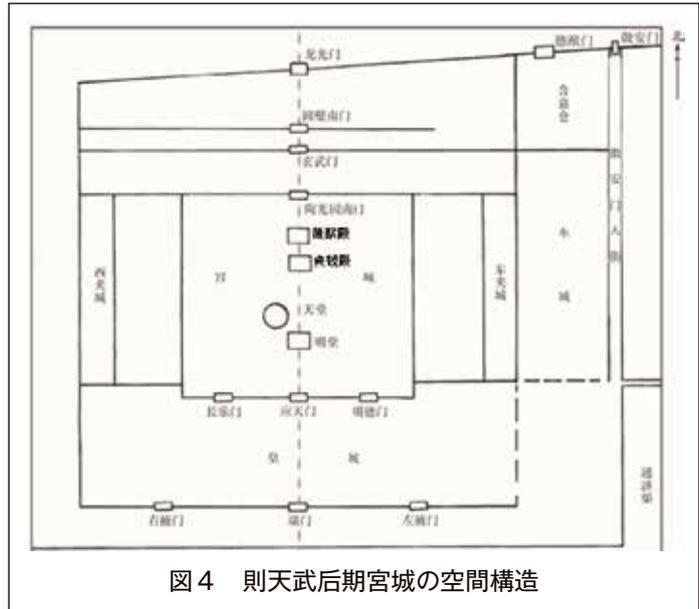


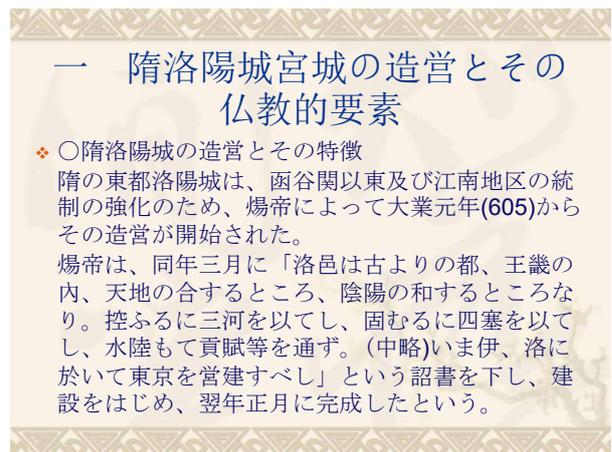
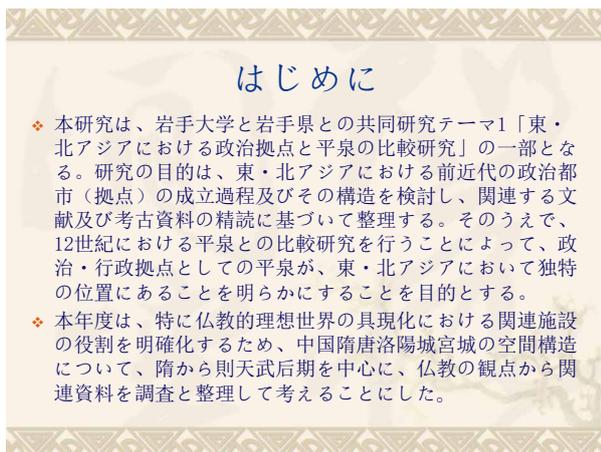
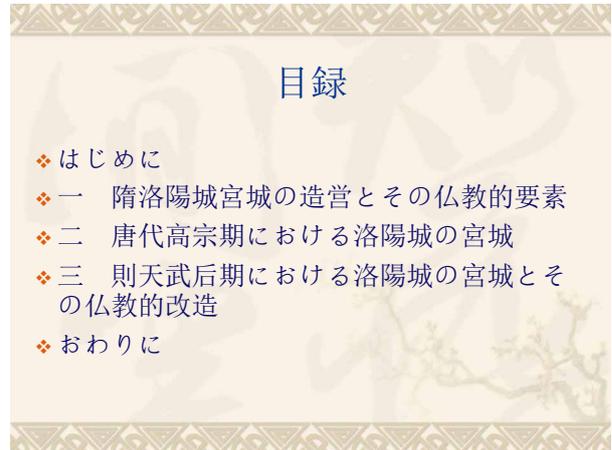
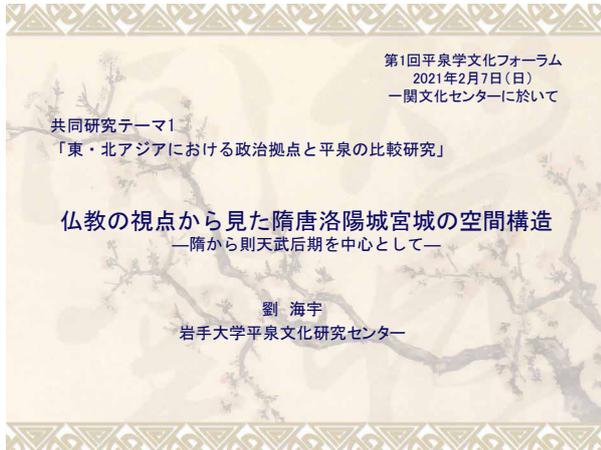
図4 則天武后期宮城の空間構造

基本的空間構造を大きく改造し、「前朝」の正殿乾元殿を仏堂の性格の明堂に改築し、またその後ろに弥勒大仏を安置する天堂を建立した。「後寝」の寝殿生活区・「前朝」の朝殿行政区（仏教的理想郷の空間）と宮城中軸線終点にある仏教の聖地龍門という三者を理想郷とする仏教的宇宙観が見受けられる。

大室の遣唐使（長安二年702、粟田真人一行）によって、則天武后期における仏教政策及び仏典・仏教美術品等は日本へ舶載されていた。平泉の藤原氏については、清衡が奥州支配を達成したのち、朝廷や院との結縁、自己支配の正当化を図るため、法皇や天皇の御願寺として壮大な伽藍を建立して仏教を利用することとなる。則天武后の宮城の改造とその仏教論理による政権の正当化は、平泉の仏教を考えるには一助となるだろう。

【参考文献】

- アントニーノ・フォルテ 1984 「『大雲経疏』をめぐって」『敦煌講座7 敦煌と中国仏教』 大東出版社
 妹尾達彦 1997 「隋唐洛陽城の官人居住地」『東洋文化研究所紀要』 卷133
 大西磨希子 2017 『東代仏教美術史の論考』 法蔵館
 浙江省文物考古研究所 2005 『雷峰塔遺址』 文物出版社
 曾布川寛 1988 「龍門石窟における唐代造像の研究」『東方学報』 卷60
 陳金華 2019 「唐代的内道場」『華林国際仏学学刊』 第二卷第二期
 中国社会科学院考古研究所 2014 『隋唐洛陽城1959～2001年考古発掘報告』 文物出版社
 洛陽市文物考古研究院 2016 『隋唐洛陽城天堂遺址発掘報告』 科学出版社
 羅世平 2016 「天堂法像－洛阳天堂大佛与唐代弥勒大佛样新识」『世界宗教研究』 2016年第2期
 劉海宇 2019 「隋唐時期的法舍利埋藏研究」『岩手大学平泉文化研究センター年報』 第7集



- ❖ 『隋書』食貨志によれば、徴発された労働力は、毎月200万に達したという。
- ❖ 隋唐洛陽城の構成：郭城・宮城・皇城・東城・含嘉倉城等。
- ❖ 現在確認できる規模：外郭城北壁6138m、東壁7312m、南壁7290m、西壁6776m、面積は隋唐長安城の半分強。



- ❖ 洛陽城の特徴(長安城との比較): ①洛水が城内を東西に走りぬけ、洛水につながる水渠が城内に縦横交差。②西北部に宮城・皇城が偏在。③宮城の中軸を龍門(伊闕)の方角に合わせるため南北軸のずれ。④宮城の防御的構造の優越性など。
- ❖ 理由: 自然地形の制約、政治と経済的目的。水運の便利・思想的造営理念(天の川)、宮城・皇城及び穀物倉の含嘉倉などが西北部の高台に。(妹尾達彦「隋唐洛陽城の官人居住地」)



○隋洛陽城宮城とその中軸線建築

- ❖ 宮城とは、都城の中で天子の居住区域のことである。
- ❖ 隋唐洛陽城の宮城は、その北西部に位置しており、東西壁の長さ2100m、南北壁1840～2160m、大内・東西隔城・東西夾城・玄武城・曜儀城・圓壁城からなる。



- ❖ 『元和郡県図誌』巻五に「其の宮は北に邙山に抱り、南に伊闕の口に直し、洛水都を貫き、河漢の象有り」と記され、隋の煬帝が邙山に登り、南の龍門(伊闕)を眺めて南北軸のずれをもつ宮城の中軸線を決めたという。
- ❖ 龍門とは、山の谷あいには伊水が流れ、岸を挟んで対峙する門闕のような龍門山の形状のことで、また伊闕と呼ばれた。伊水兩岸の崖壁に、北魏時代から切り開かれた龍門石窟群があり、仏教の聖地である。また、古典では、伝説の帝王大禹が龍門(伊闕)を開いて黄河の治水を成功し、天下を安定させたという。

- ❖ すなわち、隋洛陽城の宮城は、北の邙山より、玄武門—大業殿—大業門—乾陽殿—乾陽門—永泰門—則天門と続く建築が中軸線に存在しており、この中軸がさらに南へ洛水を渡り、大禹治水や仏教聖地の龍門へと続くのである。
- ❖ 隋の煬帝が、天台宗の開祖智顛に帰依するほど、仏教の篤信者で、龍門を宮城の中軸線とすることは、龍門石窟群を理想郷とするという仏教的世界観が伺えるだろう。

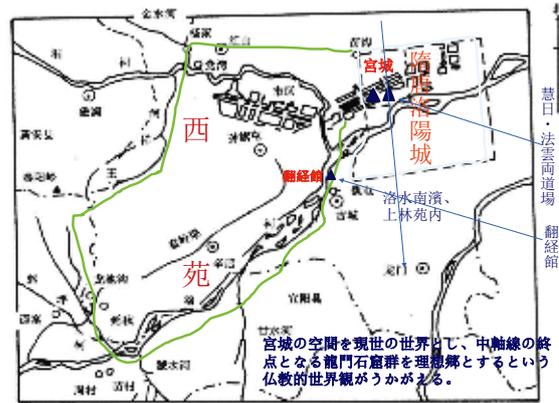
○隋洛陽城の内道場

- ❖ 1. 隋の東都洛陽の内道場
内道場とは、「宮中において仏道を修行する所。(中略)内寺」(『広辞苑』)のこととされている。隋唐時代における内道場は、宮中における仏道の「修行」する場だけではなく、時には仏典の訳場及び国家的宗教統制の行政機関でもあり(陳金華2019)、おおよそ宮城内及び禁苑の中に位置している。

❖ 隋洛陽城の宮城に慧日・法雲の両道場が存在した。最初、開皇十九年(599)楊広(のちの煬帝)は江都(揚州)で両仏教道場を造営し、606年東都洛陽の宮城に移した。『大業雜記』によれば、両道場は洛陽宮城の南西部にあり、光正門と隆慶門の間にあるという。



【河南志】隋代都城図より加筆



慧日・法雲両道場 翻経館

宮城の空間を現世の世界とし、中軸線の終点となる龍門石窟群を理想郷とするという仏教的世界観がうかがえる。

隋唐洛陽城西苑遺跡図 0 2500 5000米

2. 唐高宗期における洛陽城の宮城

❖ ○唐高宗期における洛陽城の宮城再建
隋末の戦乱により、洛陽城の宮城は破壊されており、唐太宗のときに「洛陽宮」と称されたが、再建されなかった。高宗皇帝は、顯慶二年(658)から洛陽城を東都として位置づけ、隋の宮城の空間構造を継承しながら、その中の建築等を全面的に改修・増築した。

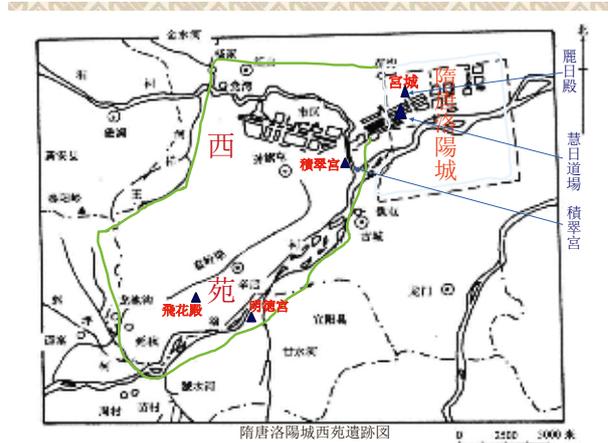
❖ 宮城の中軸線の建築は、南から応天門—乾元門—乾元殿—燭龍門—貞観殿—徽猷殿—玄武門と続き、応天門から燭龍門までは朝殿行政区、燭龍門から玄武門までは寢殿生活区である。

❖ いわゆる伝統の「前朝後寝」制度に従っていた基本的空間構造がうかがえる。

❖ 弘道元年(683)十二月に、高宗皇帝は、洛陽城宮城の貞観殿(隋の大業殿)に崩御した。

○唐高宗期における洛陽城の内道場

- ❖ 『貞元新定釈教目録』によれば、玄奘法師は洛陽大内の麗日殿で訳経し、その後、宮城の西に広がる西苑(隋の上林苑)の積翠宮・飛花殿に滞在したという。
- ❖ 言い換えれば、高宗皇帝は、宮城や禁苑の宮殿を内道場として、高僧を安置して訳経させたりしていた。



- ❖ 高宗は、東都洛陽城の宮城を大きく改修・増築したが、基本的に隋の宮城の空間構造を継承した。
- ❖ すなわち宮城の空間を現世の世界とし、中軸線の終点となる龍門石窟を理想郷とするという仏教的世界観をも受け継いだと言える。

3 則天武后期における
洛陽城の宮城とその仏教的改造

- ❖ 高宗皇帝に改修・増築された洛陽城の宮城は、則天武后期には神都の宮殿区域として仏教的に大きく改造され、長く繁栄した。
- ❖ ○武周革命とその思想的根拠となる『大雲經疏』と『宝雨經』の成立
武周革命とは、載初元年(690)に則天武后が唐王朝を中断させ、皇帝となって国号を周と改め、大周王朝を創立したことである。その思想的根拠は『大雲經疏』と『宝雨經』であると指摘されている。
則天武后の世論操作①：弥勒下生、②：転輪聖王。

『大雲經疏』

- ❖ 大雲が甘雨を降らして地を潤すように、また母が子を養育するように、神皇(則天武后)が天下に君臨することを説く。
- ❖ 釈迦が浄光天女に対して予言し、「即ち女身を以て当に国土に王すべき者は、所謂聖母神皇是なり」とある。
- ❖ また「弥勒は即ち神皇の応なり」と、則天武后を下生の弥勒仏と説く。

則天武后の尊号

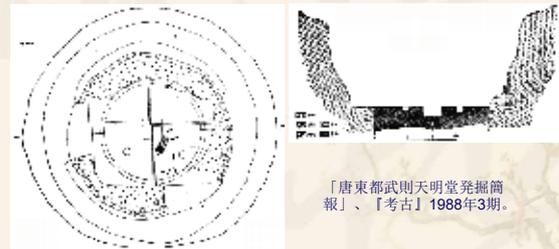
- ❖ 「金輪聖神皇帝」、長寿二年693、朝会に七宝を並ぶ。「転輪聖王」の最上の「金輪」。
- ❖ 「越古金輪聖神皇帝」、延載元年694。
- ❖ 「慈氏越古金輪聖神皇帝」、証聖元年695。
- ❖ 「天冊金輪大聖皇帝」、証聖元年695。
- ❖ 大西磨希子氏は、則天武后は「転輪聖王と言う理想的な王者のなかでも最も優れた金輪王であると同時に、この世に下生した理想郷を実現する弥勒仏が応化した存在」と指摘した(『東代仏教美術史の論考』)。

○明堂

- ❖ 明堂とは、受命の帝王のみが建立できる建物、「上圓下方」の様式とされるもので、祖先祭祀・朝見の場(正殿)。太宗と高宗の時に長く議論したが、創立できなかった。
- ❖ 則天武后は、垂拱四年688に正殿の乾元殿を解体して明堂を創立した。
- ❖ 證聖元年(695)正月に仏寺天堂の火災からの延焼によって消失されたが、翌年に再建された。

❖ 明堂遺跡の発掘

1986年、基壇八角形、東西54.7m、南北45.7m。



「唐東都武則天明堂発掘簡報」、『考古』1988年3期。

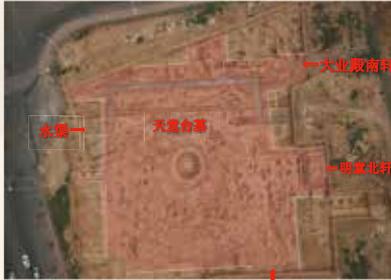
- ❖ 明堂は明らかに仏教法堂の性格をもつ。
- ❖ 長寿二年(693)九月から、則天武后は、明堂で朝議するたび、転輪王の七宝を陳設するという(『資治通鑑』)。
- ❖ また、明堂で仏事をも行った。たとえば、天冊万歳元年(695)正月、明堂で無遮會を行い、深さ五丈の穴を掘り、そこから仏像を引き出して地下より涌出したという(『資治通鑑』)。
- ❖ 長安五年(705)正月に仏舍利を明堂で供養。

- ❖ ○天堂(294尺の明堂より遥かに大きい)天堂、則天武后によって建立された仏教建築、正殿明堂の北側に位置する。大仏を安置するために造られた建物でもある(『旧唐書』礼儀志)。その仏像は弥勒像である(羅水平2016)。
- ❖ 證聖元年(695)正月に火災で焼失、再建はなかったが、その場所は仏光寺になった。

- ❖ 1977から1980年まで天堂遺跡は発掘され、金銅の造像記や『法華経』見宝塔品の刻経残石などが出土した。
- ❖ これらの遺物は天堂の性格を示す。
- ❖ すなわち、天堂は『法華経』に見える七宝塔であり、則天武后こそが四天王宮・三十三天を統治する女帝であることを宣言する装置でもある。
- ❖ 『大雲経』にも王位を継いだ王女増長が七宝塔を建立するとある。



円形建築遺跡



基壇ほぼ方形、東西69.15南北77.7m、巨木を中心柱にして高層建築を造営。

円形建築の中心柱及び地宮



地宮：円形、壁は石で築かれ、底部の中心に礎石が置かれる。

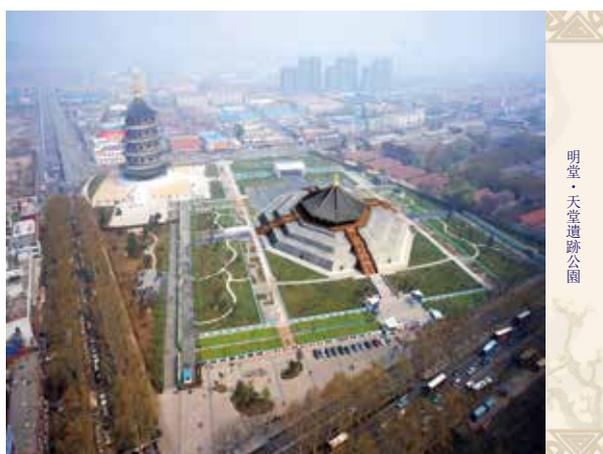
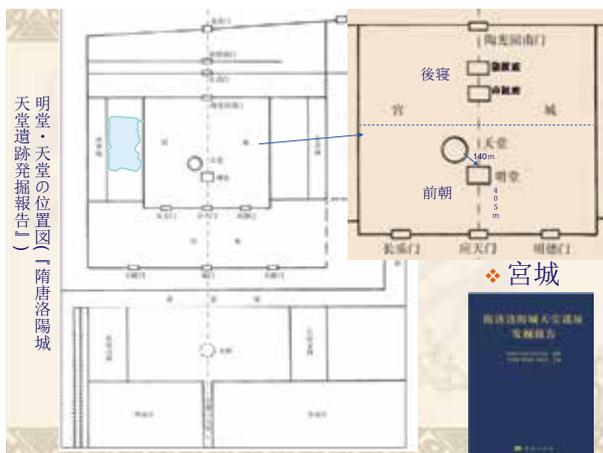
出土遺物



天堂遺跡出土造像記：
「維大唐神龍元年歲次己巳四月庚戌朔八日丁巳，奉為皇帝皇后敬造釋迦牟尼佛一鋪，用此功德，資助皇帝皇后聖化無窮，永充供養。」
神龍元年：705年(中宗)



- ❖ 『法華經』見宝塔品刻經殘石
- ❖ 天堂の性格を示す七宝塔、四天王宮・三十三天を統治する女帝
- ❖ 『大雲經』にも王位を継いだ王女増長が七宝塔を建立するとある。



おわりに

- ❖ 煬帝によって創建された隋東都洛陽城の宮城は、その中軸を龍門の方角に合わせるため南北軸のずれが見られ、都市計画に仏教的要素が取り入れられただろう。
- ❖ その都市プランに、宮城の空間を現世の世界とし、中軸線の終点となる龍門石窟を理想郷とするという仏教的世界観が伺えると思われる。
- ❖ 唐代初期の高宗期には東都洛陽城の宮城を大きく改修・増築したが、基本的に隋の宮城の空間構造を継承した。

研究報告 1-2 「東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究」

奥州藤原氏の「拠点づくり」の考え方とその影響

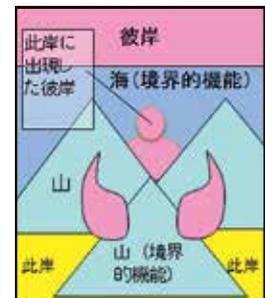
—東日本地域を中心として—

大道 篤史・戸根 貴之

奥州藤原氏は12世紀の平泉に居館・寺院・聖山の三者を東西軸に並べ、他に類を見ない完全な仏国土（浄土）を造形したが、東日本地域において「仏国土（浄土）」の造形をもとに「地域拠点」形成を行った事例を抽出し、比較検討を進めたところ、①三者が大きく離れるもの、②居館とは離れるが、居館から見て北東方向に寺院－聖山が位置するもの、③近距離に三者が南北軸に一列に配置されるもの、という3つの傾向がみられた。

1 はじめに

奥州藤原氏が仏国土（浄土）を平泉の地に造形した12世紀は、来世の極楽浄土往生を願う阿弥陀信仰が隆盛を迎えた時代である。そのきっかけとして1052年の「末法入り」が大きく影響している。阿弥陀信仰を色濃く反映させた絵画が12世紀以降に多く描かれることになるが、そのうちの一つに「山越阿弥陀図」（右記）がある。臨終間際に阿弥陀如来とその脇に侍す観世音菩薩、勢至菩薩が来迎し、極楽浄土まで導いてくれる、という教えを描いた仏教絵画である。2人の菩薩は山を下りて此岸にわたり、阿弥陀如来は極楽浄土から此岸と彼岸の境界である山際まで来迎することが描かれ、此岸と彼岸と境界である山が一体として描かれる。そのように山は聖なる場所として意識されてきたといえる。



山越阿弥陀図
(永観堂禅林寺 所蔵)

現段階では、柳之御所遺跡（居館＝御所）を「此岸」とし、無量光院（寺院＝御堂）を「彼岸」の造形と見立て、その両者が近接化するのが12世紀の特徴と考えている。さらに周囲の小丘陵状の地形を信仰対象の山とし、その三者を「仏国土（浄土）」とする造形が見られる。

12世紀の東日本地域において平泉のような「仏国土（浄土）」の造形をもとに「地域拠点」形成を行った事例が見られるのか、またそれは奥州藤原氏の「平泉」の影響を受けたものか、について比較検討を進めていきたい。

2 調査の進め方について

今年度から岩手大学との共同研究を5か年計画で進めることとなった。研究内容は以下のとおりである。

世界遺産としての平泉の新たな学術意義を確認するため、東・北アジアにおける前近代の政治都市（拠点）の成立過程を検討し、12世紀における平泉との比較研究を行い、政治・行政拠点としての平泉が、東・北アジアにおいて独特の位置にあることを明らかにする。

今年度は日本列島の近世以前における政治都市の成立過程を整理することとし、以下の方法を進めることとした。

(1) 集成するにあたり比較する項目について

12世紀に特徴的な 御所（居館）－御堂（寺院）－聖山の近接化について、それぞれ以下のような項目を備えた事例を中心に集成する。

① 居館遺跡の特徴として

- 土師質土器（かわらけ）を多く有すること
- 中国産陶磁器や青白磁の出土がみられること
- 大規模な掘立柱建物

② 寺院の特徴として

- 仏堂の規模が確認できること。（阿弥陀堂に限定しない）
- 仏堂前面に園池を持つこと

③ 「聖なる山」＝「信仰対象の山」として

- 寺院または居館周辺に眺望可能な小丘陵状の地形が位置すること
- 小丘陵の「聖的＝信仰的」な対象として以下のいずれかの特徴をもつこと。
 - ・西方に位置する。
 - ・経塚を持つ。
 - ・廟・墓所を持つ。

(2) 仮説について

東日本地域において奥州藤原氏の影響力は強く、同時期に浄土庭園伽藍を氏寺として居館の周辺に持つ事例は多かったと考える。同様に山を「聖」的な対象としてみる日本古来の自然信仰的な考え方は多くみられると考えるが、その完成度において平泉の造形を上回るものは見られない。

(3) 今回の調査箇所

- ・岩手県 平泉町
- ・岩手県 紫波町日詰
- ・福島県 会津坂下町
- ・福島県 いわき市
- ・栃木県 足利市
- ・神奈川県 鎌倉市
- ・静岡県 伊豆の国市菫山



3 各地域の事例

(1) 岩手県内

① 平泉（岩手県西磐井郡平泉町） 居館○— 寺院（園池）○ — 聖山・経塚○

■居館 「平泉館」 柳之御所遺跡の堀内部地区が相当。政庁的役割を果たしつつも仏具の出土、持仏堂の存在の可能性など日常的に宗教的活動を行っていたと考えられる。発掘調査により12世紀後半に無量光院との連結を示す橋脚跡が「猫間が淵」から検出されており、橋が架けられていたことが推測できる。

■寺院 無量光院（居館内の持仏堂を発展したものが無量光院と考えられる）
翼廊・中島を持つ浄土庭園が伽藍前方に広がる。京都宇治の平等院を模して建てられたといわれる。伽藍中軸線は東西軸よりややずれる。

▲聖山・経塚 金鶏山（山頂部に経塚が設営。弥勒下生を願望する兜率天浄土の「聖なる空間」として認識される）

◎居館—寺院—聖山が東西軸に並び、聖山のさらなる西方に極楽浄土が存在する、という仏教的方位を完全に反映。



柳之御所遺跡出土 仏教関係の遺物

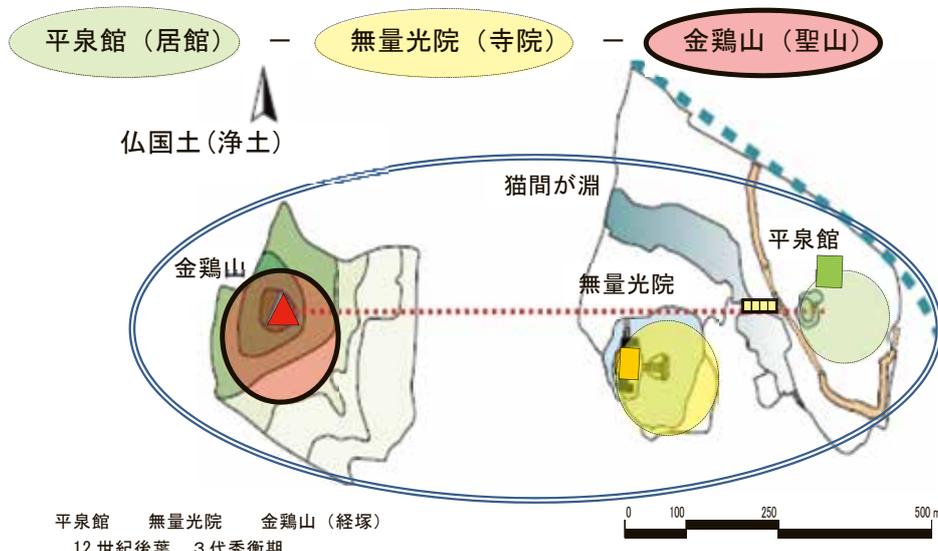


猫間が淵にかかる橋脚跡と金鶏山



金鶏山山頂への日没

< 3代秀衡期の仏国土（浄土）の模式図 >



平泉館 無量光院 金鶏山（経塚）
12世紀後半 3代秀衡期

② 日詰周辺 (岩手県紫波郡紫波町) 居館○ — 寺院 (園池) ? — 経塚○・聖山×

- 居館 比爪館跡 (紫波町南日詰箱清水。中心域は現赤石小学校敷地)
…「吾妻鏡」に記載の樋爪俊衡 (奥州藤原氏と血族関係) の居館か。
1120年代～1189年まで機能。
- 寺院 「大莊嚴寺」の伝承。五郎沼北岸に位置。12世紀の寺院の可能性。
五郎沼は人工の池であり、中島らしき「観音島」=「島の堂」と呼ばれる地名あり。
- ▲経塚 五郎沼の南に経塚があったとされる。(南日詰経塚遺跡)



比爪館中心域付近 (現赤石小学校)



五郎沼北岸から



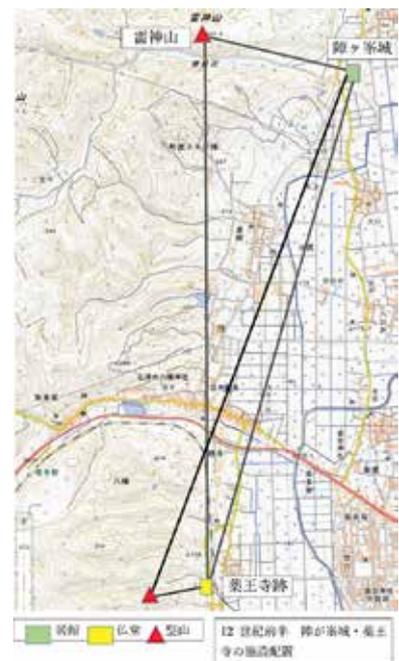
五郎沼経塚

他に宮城県栗原市花山に所在する花山寺跡についても12世紀末頃の建立、寺院背後の北方に山陵が位置し、東方には経塚群が所在するなどの特徴を持つが、為政者の居館跡が明確にはなっていない。

(2) 福島県内

③ 会津地方 (福島県河沼郡会津坂下町) 居館○—寺院 (園池) △—聖山・経塚○

- 居館 陣が峯城 (陸奥国蛭川荘) 12世紀前半の様相
二重堀で居館を包囲 ※初期の平泉館に類似
白磁四耳壺、白磁水注等が掘立柱建物跡周辺から出土。
松喰鳥文様をもつ和鏡、「権衡」(はかりの重り…古代大宝律令の重さの単位) が出土。(行政的役割も持つ)
木器、鉄鎌、炭化した米粒 (包飯) など出土。(朝飯時に襲撃を受けた状況)
- 寺院 薬王寺遺跡 ※12世紀前半頃に成立。12世紀後半頃に廃絶 (陣が峯城と同様)
陣が峯城の南方4kmに立地
山門手前の駐車場付近に当時の伽藍と浄土庭園が広がることを発掘調査により確認。
東側が池、西側が建物、浄土庭園を持つ寺院の可能性



西側の建物…… 5 × 1 間の四面庇に翼廊を持つ建物。
 東面して立地。大日如来、阿弥陀如来等を安置。
 東側の園池……貯水池的な性格を有する土坑から園池に導水。
 ※柳之御所遺跡の園池と似た構造

- ▲聖山 薬王寺の背後（西方）の山頂付近に経塚。夏至に山頂に日が沈む。
 ※陣が峯城西方には雷神山経塚あり

◎居館背後に聖山は位置するが、寺院との距離は離れる。
 越後の城氏や蜷河荘の荘園領主の藤原忠実との関連が想定



西方の陣が峯城を臨む



陣が峯城の堀跡



陣が峯城平場



陣が峯城出土陶磁器



陣が峯城出土の権衡



雷神山経塚ふもと付近



陣が峯城出土のつぶて石



薬王寺遺跡山門



伽藍、園池跡付近

④ 浜通り地方（福島県いわき市） 居館？—寺院（園池）○—聖山・経塚○

■居館 東方の新川下流の平地部分（うち町周辺域）にこの地域一帯の支配者の岩崎氏居館が推測されるも詳細は不明。

■寺院 白水阿弥陀堂（12世紀前半までさかのぼる可能性）藤原清衡の娘（または秀衡の妹）の徳尼（岩城則道の妻）によって造営。※岩崎氏（岩崎忠隆）によって建立の説もあり。

三間四面の阿弥陀堂 ※中尊寺金色堂と同系譜

- ▲聖山・経塚 白水阿弥陀堂の背後（北方）に経塚山。





三間四面の阿弥陀堂



浄土庭園と東側の山



阿弥陀堂と経塚山

(3) 関東地方

⑤ 栃木県足利市 居館○—寺院(園池)○—聖山△

■居館 鏝阿寺。鎌倉幕府有力御家人足利氏の居館。

■寺院 樺崎寺(鎌倉時代初頭。足利氏2代目の足利義兼が奥州合戦祈願として建立。※平泉の寺院を模して造形。居館の鏝阿寺から4.5km北東に位置。東麓に八幡池(亀池)…小角礫を疎に敷き詰めた州浜状。

※阿弥陀仏以外の安置仏もあるが、西方は意識…極楽浄土を重視。永福寺と共通。

▲聖山 八幡山(樺崎寺の西背後に位置)



樺崎寺浄土庭園



八幡神社と背後の八幡山



足利氏居館の鏝阿寺

⑥ 神奈川県鎌倉市 居館△—寺院(園池)○—聖山○

■居館 鎌倉・大倉幕府(政庁)。約800m北東(鬼門)方向に永福寺。

■寺院 永福寺(源頼朝が奥州合戦後に平泉の寺院を模して建立。「吾妻鏡」薬師堂、釈迦堂、阿弥陀堂が連なって園池に面した造り。

※伽藍の方位は阿弥陀堂の西が優先される。

▲聖山・経塚 寺院背後の西方の山は背景的效果。園池をはさんで東方に経塚山が位置。





永福寺礎石跡と西方の山



園池東方の経塚山



永福寺の復元CG

⑦ 静岡県伊豆の国市菰山 居館○—寺院（園池）○—聖山△

■居館 御所之内遺跡。12世紀後半にさかのぼる北条氏の居館。

狩野川東岸の自然堤防上の守山丘陵の谷間に立地。

掘立柱建物の存在確認。南側に八幡神社。

■寺院 願成就院。守山東側に臨池伽藍寺院。（1189年、北条時政が建立）

園池形状の確実な護岸施設は未検出。

※瓢箪型の池を描写した古文書あり。

※西を意識した東面する伽藍構成。

▲聖山 南東側の「守山」が聖山的存在。

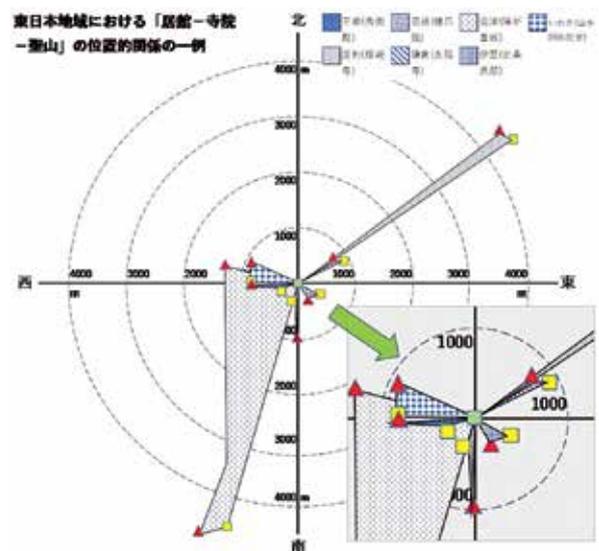


他に鎌倉幕府の有力御家人の畠山重忠が建立したとされる旧平沢寺跡（埼玉県嵐山町所在）も浄土庭園伽藍を有していたこと、経塚・信仰対象の山が周囲に位置すること、さらに居館が北西約1.5kmの近辺に所在したと推測されており、同様の特徴を備えている。

4 小結

以上の調査内容について地域拠点を形成する三者の関係をまとめてみる。居館■を中心において寺院■、聖山（信仰対象の山）▲を地図上で結び付けて表現したものが右の図であり、次のような傾向が見て取れる。

- ・紫色に大きく広がっているのが会津坂下の陣が峯城—薬王寺、聖山の関係。
- ・足利氏の樺崎寺と頼朝が建立した鎌倉の永福寺も居館との距離は遠く離れる。居館から見て北東方向に寺院—聖山が位置する点も共通。
- ・奥州藤原氏と強いつながりを持つ紫波町日詰では、近距離に居館—寺院—経塚が南北軸に一直線に配置。
- ・平泉の秀衡期の無量光院を中心とした配置……東西軸に並び、眺望できる関係。仏教的方位も備わっており、他に類を見ない完全な仏国土（浄土）を表現。



A 居館－寺院－聖山 が近接して立地

①の平泉、②の日詰、⑦の葦山

居館・寺院・信仰対象の山（聖山）の関係が近接して立地。特に平泉は仏国土（浄土）を居館と聖山も絡め、当時の浄土思想を十分に現実世界に表現。その後の鎌倉仏教にも大きな影響を与えたものと考えられる。

B 寺院－聖山は近接、寺院－居館は遠距離に位置

④のいわき、⑤の足利、⑥の鎌倉

寺院－聖山は近接するが、居館は離れる特徴。背後に信仰対象の山が位置すること、居館と寺院の距離は離れていることが共通性。

鎌倉幕府関係者が建立した永福寺や樺崎寺は、居館から見て北東の「鬼門」の方向に建立。

C 居館、寺院、聖山がそれぞれ離れる

③の会津

会津の場合は最も距離が離れた位置関係。居館、寺院のそれぞれに信仰対象の山が位置する特徴。

関係性としてはBの鎌倉・足利などは平泉の影響が考えられる。会津は平泉と直接的な関係性は認められない。

【参考文献】

- ・「御館の時代」2007「中世前期の磐城－開発の拠点と遺跡－」中山雅弘 高志書院
- ・「樋爪俊衡と高水寺の走湯権現－平泉までの道・平泉からの道－」2015 菅野文夫 岩手大学平泉文化研究センター年報第3集
- ・史跡樺崎寺跡シンポジウム 2010 「日本における浄土庭園の変遷」
- ・「陣が峯城跡 調査の概要」福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- ・文化財シンポジウム「12世紀の奥羽越」報告書 2006 福島県河沼郡会津坂下町教育委員会
- ・「12世紀の日本国と奥羽越」柳原敏昭、「12世紀の会津」吉田博行、「12世紀の会津」中山雅弘
- ・「寝殿造系庭園と浄土庭園」1998 大澤伸啓 日本庭園学会誌6
- ・「東日本初期武家政権の考古学的研究～平泉勢力圏の位置づけを中心に～」2011 羽柴直人
- ・「日本古代の庭園と景観」1994 本中眞 吉川弘文館
- ・「日本庭園の歴史と文化」2015 小野健吉 六一書房
- ・「中世寺院 暴力と景観」2007年 小野正敏 高志書店
- ・「大貫館山館跡ほか」1990 宮城県文化財調査報告書第137集 宮城県教育委員会
- ・「関東における鎌倉時代前期の庭園」2012 大澤伸啓 平成23年度庭園の歴史に関する研究会報告書『鎌倉時代の庭園－京と東国－』奈良文化財研究所
- ・「中世東北の地域区分」2003 入間田宜夫 東北文化の広場7 東北文化シンポジウム報告『いくつもの東北』東北芸工大東北文化研究センター

研究報告2 「学校教育における世界遺産の教材化についての研究」

今野 日出晴

県内の「平泉学習」は、小学校では、社会科の授業や総合的な学習、修学旅行などで多く実施されているが、中学校や高校では、歴史的分野や日本史の授業で扱うものにとどまっている。小学校から高校までの一貫したねらいのもとで、校種に応じて、年間指導計画に位置づけることができるようなものとして、新たな教材－ICT（情報通信技術）を活用したデジタル教材の開発も含めて－とセットにして「平泉学習」が提起されるべきであろう。

はじめに

本研究は、（1）世界遺産教育の具体的な実践事例を収集する、（2）世界遺産「平泉」における、よりよい世界遺産教育のあり方の検討と成果の実現を目指す（新たなデジタル教材の開発）、（3）世界遺産の保存管理に係る理解の深化と、保存管理を担う若い世代の育成を目指す、ことを全体目標にしている（2020年度から2024年度の5カ年計画）。

端的に言えば、世界遺産教育「平泉」のデジタル教材を開発するとともに、ICT環境のなかで活用できる、新たな学習モデルを提案し、世界遺産教育の革新をはかろうとするものであった。そのため、全国各地の世界遺産教育の実践事例に関して、特に、デジタル教材に積極的な地域に赴き、そこでの開発教材と活用方策などを調査し、それらの成果をもとに、世界遺産教育「平泉」の新たなデジタル教材を開発し、その活用と普及を目指そうとするものであった。

しかし、コロナ禍のなかで、全国への調査が困難な状況となり（それは次年度以降に実施する）、かわって今年度は、岩手県内における世界遺産「平泉」教育の実態を明確化することを目標とした。そのために、まず、県内の小・中学校、高校へアンケート調査をおこない、そこから、世界遺産教育「平泉」の実施状況を提示したい。そして、それをふまえて、今後のデジタル教材等を開発するに際して、どのようなことが課題となるのか、今後の研究の方向性を明らかにしたい。

1 アンケートの確定と実施

まず、県との共同研究という趣旨を活かして、小・中学校、高校と校種ごとに、協力委員を選定し、関係者会議を組織した⁽¹⁾。ここで、アンケートの内容の確定、実施、分析等を行い、今年度の研究を進めていくこととした。同時に、今後の研究を推進するための母体となるものとして位置づけた。

アンケートの内容については、当初は、デジタル教材を開発したとしても、ICT（情報通信技術＝Information and Communications Technology）環境が整っていなければ、活用されることはないということから、そうした点についての調査も想定していた。しかし、すでに、文科省は、「初等中等教育における教育の情報化の実態等を把握し、関連施策の推進を図るため」に、「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」（2019）をおこない、都道府県ごとに、その結果を公表していた⁽²⁾。さらに、岩手県教育委員会でも、学校教育においてICTを効果的に活用し、学習の質を高めるため、県教育委員会と市町村教育委員会とが連携しながら学校教育の情報化を推進する「岩手県学校教育ICT推進協議会」を設置するにともなって、各校のWi-Fi環境や校内LANなどに関するアンケートを実施していた（2020年10月）。さらに、文科省では、GIGAスクール構想（2019）⁽³⁾では、国公私立の小・中・特別支援学校などの児童生徒一人一台端末、さらには、クラウド活用できる高速大容量の通信ネット

ワークを一体的に整備しようと提起していた。コロナ禍のなかで、その必要性がより一層高まり、急ピッチで整備が進み、岩手県でも、自治体ごとに進められ、今年度内に、県内の小中学校のICT環境の設備はほぼ行き渡るような状況となっている。したがって、デジタル教材を活用するICT環境については、整備されることを前提に検討することが可能となり、ICT環境については、アンケートの項目からはずして、学習内容に焦点を絞って構想することとなった。

アンケートの内容については、校種に関わらず、共通して回答を求める項目と、校種によって固有に尋ねる項目と、関係者会議で検討しながら、確定していった。その内容項目については、次章で詳しく言及するが、主要には、次のような点を中心にして、アンケートの項目を作成して、各学校の実態を調査した。それは、平泉学習をどのようなかたちでおこなっているか（社会科の授業、教科外の修学旅行等、総合的な学習など）、どのような教材を使用しているか、そして、おこなっていないとしたら、その理由はどこにあるのか、さらに、平泉学習で利用してみたいデジタル・コンテンツにはどのようなものがあるかなどである。校種ごとに異なっているものとしては、小中学校では、どのような教材を使用しているか、があげられているが、高校では、平泉学習が実施されるためにはどのような工夫が必要と考えるか設けられている。

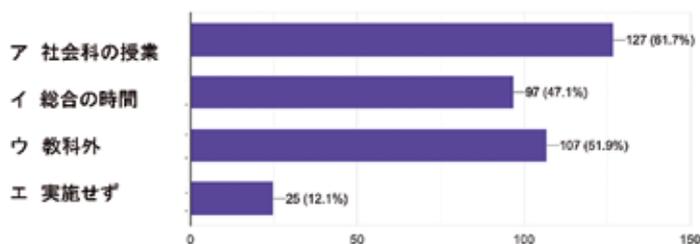
11月中旬には、各学校に対してのアンケートの調査依頼をおこなった。今回のアンケートは、紙媒体ではなく、岩手大学平泉文化研究センターのサイトに「令和2年度 世界遺産平泉に係る学習状況に関するアンケート調査について」のページをつくり、そこにアクセスして回答する形式をとった⁽⁴⁾。調査期間は令和2年の11/30（月）～12/11（金）までとしたが、年末の忙しい期間にもかかわらず、小学校212校、中学校74校、高校54校からの回答があった。岩手県の学校数は、『令和元年度 学校基本統計（学校基本調査報告書）』（岩手県政策地域部）によれば、小学校312校、中学校162校、高校80校となり、回収率は、小学校67.9%、中学校45.6%、高校67.5%となっている。

2 アンケート結果について

まず、「平泉学習」については、いずれの校種でも、教科の授業（社会科、地歴・公民科）で実施されている割合が最も高いことがわかる（小学校：61.7%、中学校：75.3%、高校：38.7%）。

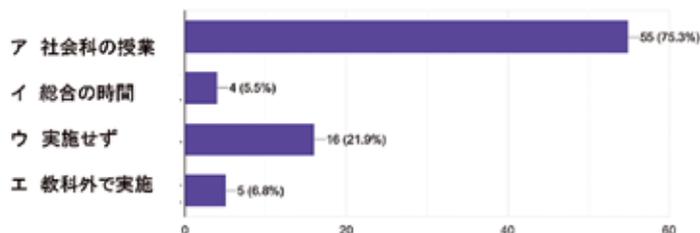
設問1 学校で平泉学習を行いましたか。【複数選択可】

206件の回答

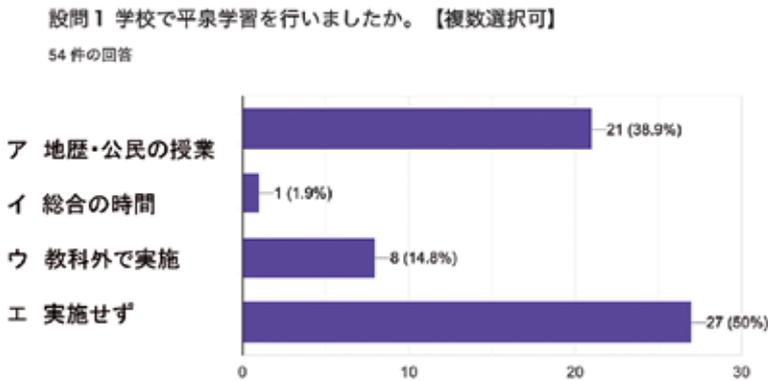


設問1 学校で平泉学習を行いましたか。【複数選択可】

73件の回答



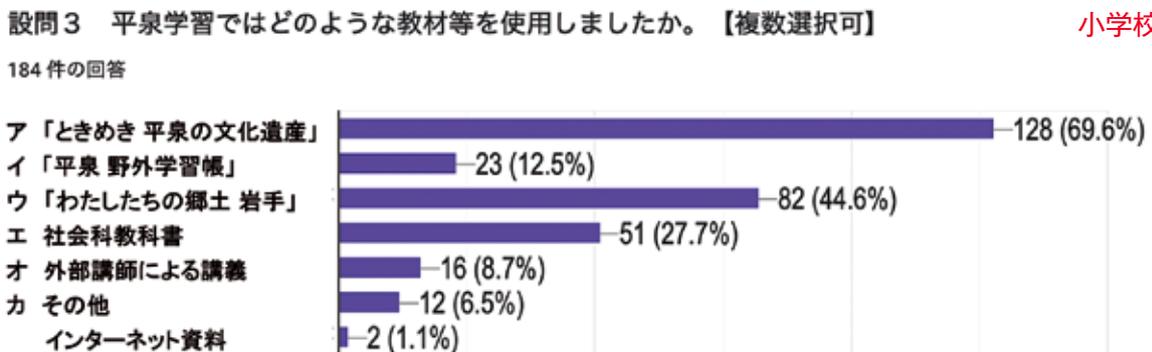
高等学校



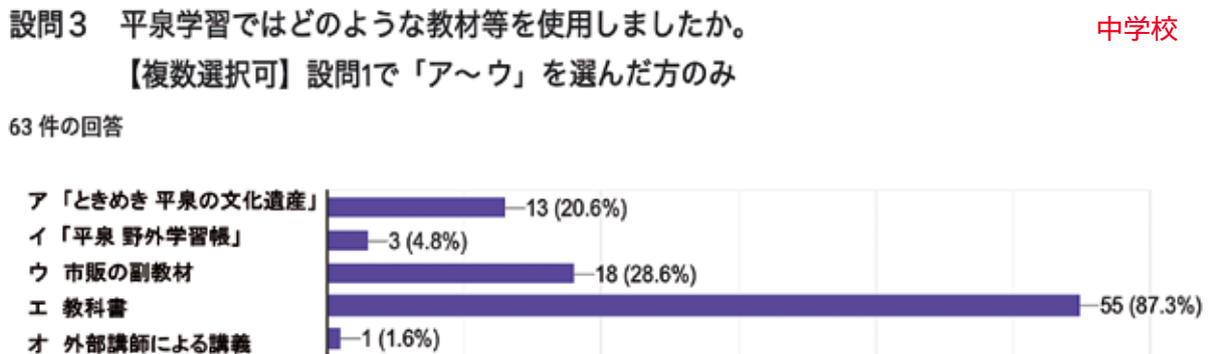
ただし、「平泉学習」の内容が具体的に示されていないために、一律に比較できないということが指摘される。そこで、後述するように、この「平泉学習」の内容を校種ごとに、一定程度明らかにして、今後の方向性を示してみたい。

ここでは、小学校と中学・高校との間に、ひとつの断絶があることに着目したい。小学校では、「社会科の授業」以外でも、「総合的な学習の時間」で扱ったり（47.1%）、「教科外の校外学習、修学旅行等で実施される」（51.9%）という状況にある。しかし、中学校・高校では、総合的な探究や教科外で扱われることは少なく、実施しなかったという事例も増加してくる（中学校：21.9%、高校：50%）。高校でも修学旅行で平泉を訪れたところがみられる（事前学習としても）が、コロナ禍のなかで、県外への修学旅行にかわって県内旅行として実施されたもので、例年の動向とは異なっている。

小学校



中学校



小学校は、社会科の授業以外でも、総合的な学習の時間で扱ったり（47.1%）、教科外の校外学習、修学旅行等で実施されること（51.9%）も多かったが、そうした機会に教材として、「エ.教科書」（44.6%）

のほかに、岩手県発行の「ア.ときめき平泉の文化遺産」(69.6%)や、県社会科副読本「ウ.わたしたちの郷土岩手」(27.7%)、さらに県発行の「イ.平泉に野外学習帳」が活用されている。しかし、中学校や高校になると、こうした教材を活用して、「平泉学習」がおこなわれることは少なくなり(総合や教科外で扱われることは少ない)、教材も、教科書がもっとも多くの割合(中学校:87.3%)となり、実施しなかったという事例も増加してくる(中学校:21.9%、高校:50%)。

さて、ここで、小学校で活用されているいくつかの教材を提示し、「平泉学習」の内容構成を考えて見たい。まず、『ときめき 平泉の文化遺産』は、旧版(2006年3月)を改訂した(全40頁、2017年3月)。改訂は、特に、新たな発掘成果を紹介すること(下図参照)と、世界遺産の意味を明示するために、全体の構成を組み替えることなどを軸に進められた⁽⁵⁾。

文章と写真を結びつけて学習できるような配慮と、丁寧にルビをふることで、小学生が理解しやすいようにしたことも、活用されていることの理由になっている。

4 さまざまな遺構と遺物

☆平泉で発見される遺構と遺物には、どのようなものがあるのだろうか。

「平泉の文化遺産」は寺院だけではなく、地下に埋もれた遺跡が多いことも特徴として挙げられます。それらは地下にあるため、地上からは価値が分かりにくいとされています。そのために発掘調査を行い、遺跡を掘り起こすことによって、当時の痕跡を少しずつ明らかにしていくのです。発掘調査によって、発見されるものは、大きく2種類に分けられます。

- 遺構

池や建物の柱の跡などの、地面に形が残っているものを遺構といいます。平泉では、地跡、池跡、柱跡のほか、道路跡、井戸跡などの遺構も発見されています。
- 遺物

陶磁器(片)や土器(片)、また、木や金属でつくった道具類など、持ち運びのできるものを遺物といいます。これらは、平泉で多数出土しています。

The Cultural Heritage of Hiraizumi

出土した主な遺物を紹介します。

- かわらけ

▷平泉で出土する代表的な遺物で、柳之御所遺跡では、10数トンも出土しました。

▷素焼きの土器で、主に宴会で使われていました。1回限りの使い捨てのものともいわれています。

▷絵や文字が書かれているものもあります。
- 陶器、磁器

▷かわらけと同じ鍋・皿などの食器ですが、灰を使って高温で焼かれた焼き物で、ほかに蓋・蓋が出土しています。

▷なかでも、中国から日本にもたらされたものは、非常に高価なものと考えられています。

▷かわらけに比べて、ほんの少ししか出土していません。
- 薪板や板の破片

▷出土する多くの板片は、もともと食器をのせるためにつくられた折敷です。

▷折敷は、いろいろな形に加工されてから捨てられていました。例えば、深さ1mほどの穴から大量に出土する、細長く加工されているちゅうぎもそのひとつです。ちゅうぎは、トイレットペーパーとして使われていました。

▷近年、カエルの絵が描かれた折敷片が見つかりました。この絵は、宮内省の貞人など限られた人々だけに知られていた国宝「鳥獣人物戯画」によく似ていることから、平泉が京都と深いつながりがあったことを示しています。

遺跡 (柳之御所遺跡)

舞台跡 (興業光院跡)

遺跡 (毛越寺)

かわらけ (重要文化財)

中国産の磁 (重要文化財)

ちゅうぎ

出土した遺物・かわらけ

カエルの絵が描かれた折敷片

他に、『平泉野外学習帳』(全18頁、2018年3月)は、社会科見学や修学旅行などで、平泉を訪れた際に体験的な学習ができるようにすることを目的に作成された⁽⁶⁾。『ときめき 平泉の文化遺産』が平泉の歴史や文化財の紹介などが中心となっているが、この『平泉野外学習帳』は、次の図のように(毛越寺を訪ねて、自分の歩幅で、金堂円隆寺の礎石間の長さを測ろうとするもの)、見学しながら、書き込むことがめざされている。

5 歩測による測量の仕方を学ぼう。



歩測とは、自分の歩幅を知ることによって距離を簡単に測ることができる方法です。
10歩歩いた距離を10で割ると、1歩の平均値が出るよ。

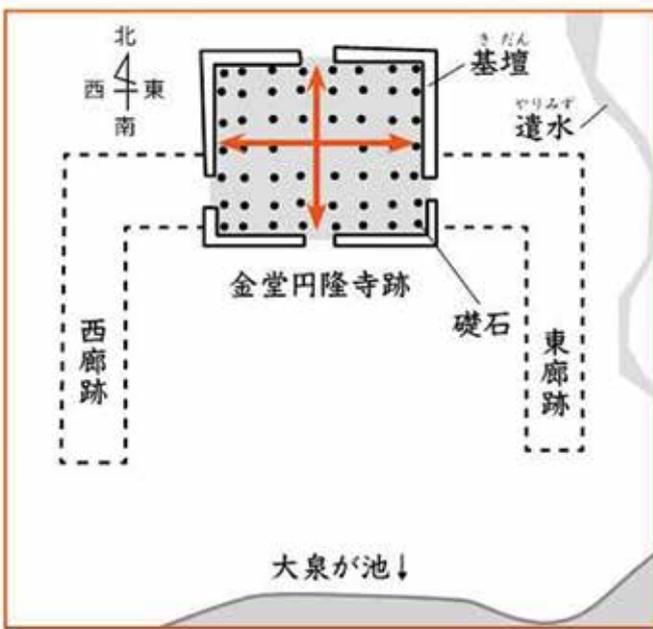
君の1歩は？ cm

注意点：目標を見つけてテンポよくまっすぐ歩く！！

野外学習で、自分の歩測の精度を試してみよう。

2 金堂円隆寺跡の一番外側の※礎石間の長さ（縦と横）を歩測で割り出し、当時の建物の大きさを調べてみよう。

※礎石（●印）…柱をのせるためにおいた石



南北の長さ

答え m

東西の長さ

答え m

建物の大きさ（面積）

答え m²

- 巻き尺で長さを測り、自分の歩測の精度を確かめてみよう。
- 自分たちの教室の大きさと比べてみよう。

また、小学校4年生では、都道府県ごとに、自分たちが住む県内の様子を学ぶために、岩手県では、『あたらしいきょうと岩手』（岩手県社会科教育研究会）が作成され、そこでは、盛岡・二戸・宮古・葛巻・遠野・平泉が記載され、平泉を学ぶ機会がある（「文化遺産をいかす」、「平泉の文化遺産とまちづくり」など）。

また、小学校6年生では、日本の歴史を学ぶことになるが、教科書によっては、発展学習「ひろげる世界遺産を調べよう～平泉～」（『新しい社会6 歴史編』東京書籍、2019年検定、42～43頁）として詳しく記されているものがある。この教科書では、2010年には、平泉については、全く記載がなかったが、2011年の世界遺産登録をうけて、2014年には、「世界遺産になった平泉」（1頁）が掲載された。そして、今回の改訂では、さらに1頁追加された（計2頁）のである。この教科書には、私も著作関係者として参加し、小学生段階ではあるが、「平泉学習」として構成される内容を示そうと考えてこれらを作成した。次頁に、中心的な記述を示すが、その周辺に4、5枚の写真が配置されるという構成になっている。まず「争いのない平和な浄土をめざして」では、①東北地方の政治情勢、②藤原氏の政治的都市としての平泉、③浄土思想と中尊寺、④仏教中心の都市、⑤構成資産（写真：金色堂、毛越寺）、⑥経済力、⑦浄土庭園の価値などが示されている。



争いのない平和な浄土をめざして

平安時代に東北地方で二つの合戦が起こり、源氏の助けをかりて、藤原清衡が勝利しました。戦乱で父や妻子をなくした清衡は、平泉に移して、争いのない平和な浄土（阿弥陀仏などがいるとされる苦しみのない世界）をつくるために、中尊寺を建てました。

敵味方の区別なく、合戦でなくなったすべての人々、さらには、命あるものすべての靈魂が、浄土に行けるような、仏の教えによる平和な理想社会をつくりたいという願いが平泉の原点です。

清衡の思いを受けついだ基衡は、仏教を中心とした平泉のまちづくりを発展させ、豊富に産出される金や他の地域との交易で得た財力を生かして、毛越寺を建てました。2度以上の火災によって、当時の建物は残っていませんが、池を中心とした庭園は、浄土を表しています。

3代目の秀衡は、毛越寺を完成させ、さらに、平等院鳳凰堂をモデルに、それよりひとまわり大きい無量光院を建てるなど、秀衡の時代に平泉は最盛期をむかえました。



柳之御所遺跡 一足もとからみえる平泉

北上川の堤防とバイパス道路をつくろうとして発掘調査されたのが柳之御所遺跡です。調査が進むにつれて、藤原氏が政治を行った重要な場所だとわかり、多くの人々が保存のために活動しました。その結果、柳之御所史跡公園として残され、調査や整備が続けられていくことになりました。

大きな堀に囲まれた中には、建物や堀、池、井戸などの跡が残っています。また、京都や中国との交流を示す土器や陶磁器などが見つかっています。特に、磁器は中国南部から東シナ海をわたり、博多や京都を経由して、太平洋岸から北上川を渡って平泉にもたらされました。平泉は、京都や博多と並ぶ文化的な都市でした。

そのほかにも、日常的に使われたさまざまな道具（へらやなべなどの調理具、はしやおわんなどの飲食具、筆やすずりなどの文具、将棋の駒や碁石などの遊具）が発見されています。

次の「柳之御所遺跡一足もとからみえる平泉」では、⑧柳之御所遺跡、⑨保存運動、⑩柳之御所史跡公園として整備、⑪遺構、⑫京都や中国との交流（土器、陶磁器）、⑬磁器の流通（中国から東シナ海、博多・京都を経由）、⑭京都や博多と並ぶ文化的な都市、⑮さまざまな道具などが記述されている。

それに対して、中学校になれば、同じ東京書籍の教科書（『新しい社会 歴史』）でも、本文には「東北地方では平泉（岩手県）を拠点に成長した奥州藤原氏が力を持ちました」とあり、図版で、中尊寺金色堂の大きな写真が掲載されている。そのキャプションには「奥州藤原氏は金や馬などの産物と北方との交易によって栄えました」というものである。

高校になれば、例えば、『詳説 日本史B』（山川出版社）では、本文で「奥州藤原氏は、清衡・基衡・秀衡の3代100年にわたって、金や馬などの産物の富で京都文化を移入し、北方の地との交易によって独自の文化を育て、繁栄を誇った」となり、脚注では、藤原氏の経済力だけではなく、発掘調査で、京都と北方の文化の影響など、広い範囲の文化の交流まで記されている。

こうして、中学・高校の代表的な教科書をみれば、その内容は、さきの①、②、⑥などの政治的、経済的な側面だけでなく、⑫、⑬、⑭などの文化的な交流の側面も記述されている。

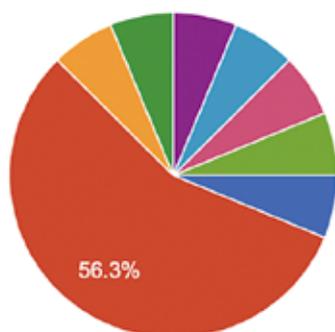
以上から、小学校段階では、社会科教科書、『わたしたちの郷土 岩手』『ときめき平泉の学習帳』『平泉野外学習帳』、そして、社会科見学や修学旅行など、「平泉学習」をおこなう条件が一定程度揃っているのに対して、中学・高校段階は、主要には社会科教科書、日本史教科書、そして資料集と限られており、「平泉学習」をおこなうための教材が十分に揃っているとは言い難い。その他にも、社会科見学や修学旅行等もおこなわれず、「平泉学習」の条件が揃っていないようにみえる。あるいは、小学校でおこなわれていることで、十分であるという意識が背後にあるのかもしれない。

その点について、「平泉学習」をおこなわなかった理由について、「ア 時間がない」、「イ 平泉学習を、教科指

設問1-1 ウを選んだ理由を教えてください。【1つ選択】*上記で「ウ」を選んだ方のみ

小学校

16 件の回答

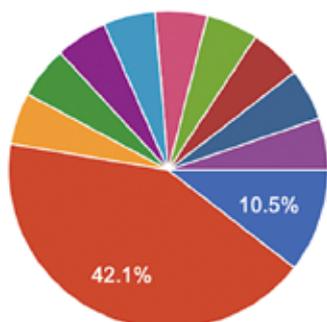


- 時間がない
- 年間指導計画に組み込んでいない
- 教える側の知識が乏しい
- 支援学校のため指導計画に組み込まず
- 知的支援学校のため生徒の実態に合わず
- 2学年の「地理」で触れる予定
- 教科外で設定したがコロナで実施できず
- 3学期に実施予定

設問 1 - 2 エを選んだ理由を教えてください。

中学校

19 件の回答

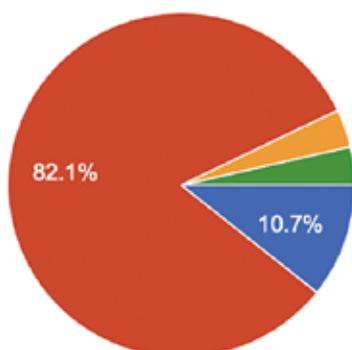


- 時間がない
- 年間指導計画に組み込んでいない
- 教える側の知識が乏しい
- 教える該当学年が在籍していない
- 1年生担任のため扱えず
- 修学旅行でのガイド説明で対応
- 平泉の見学を通し事前学習の学びを深めた
- 児童の実態から難しい
- 修学旅行で対応
- 3学期に実施予定
- 講師から事前に学んだ後に平泉を見学した

設問 1 - 2 エを選んだ理由を教えてください。【1つ選択】*設問 1 でエを選んだ方のみ

高等学校

28 件の回答



- 時間がない
- 年間指導計画に組み込んでない
- 教える側の知識が乏しい
- その他

導の年間指導計画等に組み込んでいない」、「ウ 教える側に、平泉学習を行うための知識が乏しい」、「エ その他」（内容は自由記述）として、尋ねてみると、いずれの校種でも、「平泉学習」を「教科指導の年間指導計画等に組み込んでいない」ことの割合が高く（小学校42.7%、中学校56.3%、高校82.1%）、それぞれの学校で「平泉学習」を指導計画にきちんと位置づけていないことがわかる。県民の基礎的素養として、その必要性を認識しているにもかかわらず（このことに関する設問もあったが、今回は紙幅の関係から言及しない）、中学校・高校へと進むにつれて、「平泉学習」の必要性は薄れていくということであろう。

また、今後、利用したいデジタル・コンテンツについて尋ねている。そのことへの回答は、校種による相違はそれほどみられず、ほぼ同じような割合で、上記のア～オまで、複数回答で40～60%になっている。ただし、中学校・高校へと進むにつれて、オの短時間に平泉の概要がわかるような、ストーリー性のあるアニメ等の映像に対するものの割合が最も高くなっている（中学校：60.3%、高校：53.7%）。また、高校では、他の問いで、「平泉学習」を実施するために、「授業等で手軽に使える、新しい教材の提供」を求める割合（57.4%）が高いことも考慮する必要があるだろう。

- ア 拡張現実（AR）【注】により、当時の平泉がスマートフォン、タブレット等を通して体感できるもの
- イ 中尊寺金色堂、毛越寺庭園等の仮想現実（VR）画像（ゴーグル装着）
- ウ 平泉学習アプリ（スマートフォン対応：簡易でリアルに平泉の世界を体験できるもの）
- エ 平泉学習が自学できる内容のもの（ホームページ上での情報提供や市販の資料集のようなもの）
- オ 短時間で平泉の概要がわかる、ストーリー性のあるアニメ等の映像等調査研究

【注 拡張現実（AR）】

実在する風景に仮想的な視覚情報を重ねて表示することで、当時の平泉の世界を現実として体感できる。例として「ポケモンGO」のような体験が可能となるもの。

3 今後の課題と方向性

これまでのアンケート調査の分析から、まず、小学校での体験的な「平泉学習」を踏まえて、中学校・高校へと円滑に接続して、「平泉学習」を深めていくような、小学校から高校までの一貫したねらいのもとで、学習モデルの策定が求められるであろう。それは、校種に応じて、年間指導計画に位置づけることができるようなものとして、デジタル教材も含めて、新たな教材とセットにして提起されるべきであろう（それは、中学・高校での短時間で学びたいという要求にも応答しうるようなものとしても考慮する必要がある）。

それでは、さきのアンケート分析で示したように、中学校・高校では、「平泉学習」をおこなうための条件が揃っていないのだろうか。中学校では、新しい『学習指導要領』が、2021年には、全面実施され、高校では、同じく2022年から年次進行が予定されている。ここでの「身近な地域の歴史」（中学校社会）や「地域社会の歴史と文化」（高校『日本史探究』）は、全く関連しないのだろうか。

中学校社会の歴史的分野の内容A「歴史との対話」では、「（2）身近な地域の歴史」は次のように位置づけられている。「自らが生活する地域や受け継がれてきた伝統や文化への関心をもって、具体的な事柄との関わりの中で、地域の歴史について調べたり」、「地域に残る文化財や諸資料を活用して、身近な地域の歴史的な特徴を多面的・多角的に考察し、表現すること」となっている。さらに、『学習指導要領 解説 社会編』では、「身近な地域の歴史」を学習する意義として、「身近な地域は、歴史上の

出来事を具体的な事物や情報を通して理解することができるとともに、それを自らが生活する日常の空間的な広がりの中で実感的に捉えることができる学習の場である」ことを掲げている。

さらに、「地理歴史編」の『高等学校学習指導要領』では、今回『日本史B』にかわって、新に設置された『日本史探究』には、「地域社会の歴史と文化」について扱うようにと位置づけられ、その学習は、中学校社会科歴史的分野における「身近な地域の歴史」の学習成果の上に立ち、地域社会の変化に関わる考察を通じて我が国の歴史への理解を深めるものであるとされている。そして、解説編では、「地域の範囲」を「生徒の日常の生活圏、学校の周辺、現在の市町村や都道府県域、それらを外包する地方など」と想定し、近現代では、「古代の東北、古代の東北、中世の瀬戸内、近世の江戸と関東というような地域」が例としてあげられている。

時	学習内容と展開の概要
1	金色堂の修復 ・「NHKプロジェクトX 金色堂大修理」を視聴し、金色堂の価値についてまとめる。
2	奥州藤原氏の豊かさ ・大量の「かわらけ」の出土から、当時平泉が京都、博多に並ぶ都市であったことを理解する。 ・都の仏師と藤原基衡のやり取りから、奥州藤原氏の豊かさを読み取る。
3	平泉の国際性 ・中国産白磁、渥美焼・常滑焼などの出土品から、平泉が当時の日本を代表する消費都市であったことを考える。 ・中国産の白磁が出土した事実をもとに、平泉が「海のシルクロード」の東の終着点であった可能性について考える。
4	平泉の価値についてのまとめ ・3時間の学習を通して学んだことをもとに、平泉の価値についてまとめる。

さらに、「地域の特色や地域間のつながり等の理解を通じて地域社会と国家の歴史的な関わりについて考察することができる」として、その例に「東北・北海道などからの視点や沖縄・九州などからの視点で歴史を見たり、環日本海や環東シナ海など海を媒介としてアジア諸地域とつながる地域という枠組みで見たり」「歴史を地域的な多面性で捉えることが考えられる」としていることは注目される。ここには、単に日本の歴史のなかの一部分としての地域ではなく、その地域から日本全体の歴史を捉え直していくための視点としての地域が明瞭に意味づけられている。それは、かつての地方ではなく、環日本海や環東シナ海など、日本を越えるような地域としての視点が提唱されている。

こうした新たな方向性を踏まえて、すでに試行的な実践もおこなわれている。コロナ禍のなかで、中止となってしまったが、2020年に「全国歴史教育研究協議会 第61回研究大会（岩手大会）」（実行委員長 花巻南高校 菅原一成校長）が開催予定であった。ここでの大会テーマは、「新しい歴史教育の実践へ向けて」であり、同名のシンポジウムも企画されていた。このシンポジウムもおこなわれなかったが、幸い、発表内容を踏まえた原稿が会誌に掲載されることとなった⁽⁷⁾。特に、「平泉学習」との関連で、興味深いのは、盛岡市立上田中学校 上田淳悟 主幹教諭の実践である。それは、「平泉の歴史的価値を考える」というもので、単元の指導計画は以下の通り。全4時間の単元計画だが、その内容は、先に示した内容でいえば、②藤原氏の政治的都市としての平泉、⑤構成資産（写真：金色堂、毛越寺）、⑥経済力、⑫京都や中国との交流（土器、陶磁器）、⑬磁器の流通（中国から東シナ海、博多・京都を經由）、⑭京都や博多と並ぶ文化的な都市などが触れられている。それだけでなく、2時間目では、史料として『吾妻鏡』文治5年9月17日条の「寺塔已下注文」を使い、ここから生徒に「仏師と基衡とのやりとり」を読み解かせている。さらに、平泉の「建築物や出土物を丁寧に読み取ることによって、平泉の歴史的価値を明らかにしよう」としたものであった。中学生の段階に応じて、史料の読み取りが大きな位置を占めている。小学校の体験学習を中心とする「平泉学習」とは質の異なったものとして構想され実践されていた。さらにいえば、この実践には、「海のシルクロード」の東の

終着点としての平泉が位置づけられ、さきの国家を越えた交流という視点も意識されている。校種ごとの発達段階に応じた「平泉学習」の深め方がはっきりと提示されているのである。

これは、高等学校の「日本史探究」でも同じように展開することが可能であろう。それは、「地域の史料から教科書の記述を深めていくような方法は、その際の一つの方向性を示している」のであり、「地域の新たな歴史教材」をどのように開発し、豊かな内実をつくっていくのか、そうした課題をきちんと受けとめることが求められている⁽⁸⁾ということであった。その意味では、例えば、中世の「陸奥国骨寺村絵図」を活用して、「荘園絵図を読む」という実践—そこから中世の風景を再現する—や、現代で言えば、「柳之御所保存運動」を主題に、「文化財と私たち」を考えるような実践など、いくつも新たな歴史学習は想定できるであろう。こうした視点と切り結んで、デジタル・コンテンツの開発が実現できれば、新たな可能性が開かれていくであろう。小学校であっても、物理的な距離や予算的な問題から、なかなか平泉に赴いて体験学習をおこなうことが難しい学校もある。さらに、小・中・高校ともに、時間的な制約のなかで、新たなデジタル・コンテンツが、特にARやVRを活用することは大きな魅力になるだろう。そして、それは、ICT（情報通信技術）やVRを活用し、一人ひとりの能力や特性に応じた学習指導の充実、遠隔教育の普及、新たな学びの体験の創出をねらいとした岩手県の「学びの改革プロジェクト」とも合致するものでもであろう。

- (1) 関係者会議は、岩手大学から平原英俊、今野日出晴、土屋直人、岩手県から千葉正彦、半澤武彦、協力委員として熊谷道仁（平館高校）、千葉憲一（一関市立大東小）、及川仁（花巻市教委）、松田薫（花巻市立桜台小）、上田淳悟（盛岡市立上田中）で進められた（敬称略）。ここでの議論が本稿にも活かされている。感謝申し上げたい。
- (2) https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/1420641_00001.htm
- (3) 「GIGA」とは「Global and Innovation Gateway for All」の略で、「多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育ICT環境を実現する」ことを目的としている。https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.htm
- (4) 「令和2年度 世界遺産平泉に係る学習状況に関するアンケート調査について」
<https://chs.iwate-u.ac.jp/questionnaire2020/>
- (5) 発行は「世界遺産平泉保存活用推進実行委員会」で、事務局は「岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課」で、検討委員は「菊池勉、熊谷道仁、今野日出晴（座長）、千葉憲一、松田薫」であった。この検討委員が、今回の関係者会議でも中心となっている。
- (6) 発行・事務局・検討委員は、さきの『ときめき 平泉の文化遺産』と同じであり、以下のサイトからダウンロードできる。
<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0909/download/H30/yagai%20gakusyuchou.pdf>
- (7) シンポジストと報告名は以下の通り。上田淳悟（上田中）「地方からの視点でこそ発揮される『歴史的な見方・考え方』～地域教材の開発を通して～」、梨子田喬（盛岡一高）「『単元を貫く問い』を核とした授業デザイン」、小田中直樹（東北大学）「歴史教育における高大接続のコアは何か」、そして、全体のコメントとして、今野日出晴「『問い』を立てるということ」であり、『全歴研研究紀要』第57集（2021年3月刊行予定）に掲載予定である。
- (8) 今野日出晴「『問い』を立てるということ」（『全歴研研究紀要』第57集、2021年3月刊）。

第1回平泉学フォーラム 2021.02.07

世界遺産「平泉」の教材化についての研究

岩手大学 今野日出晴

「日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究」

□研究目的

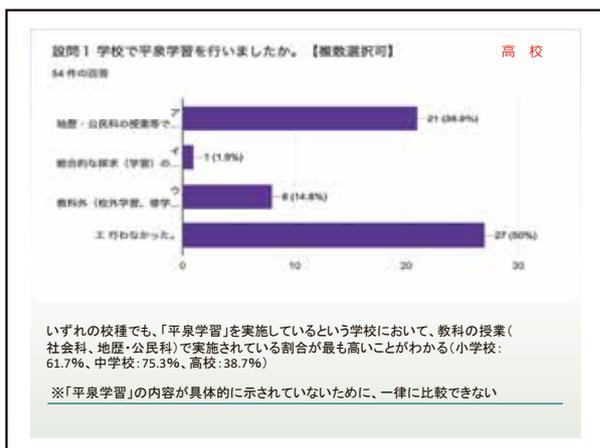
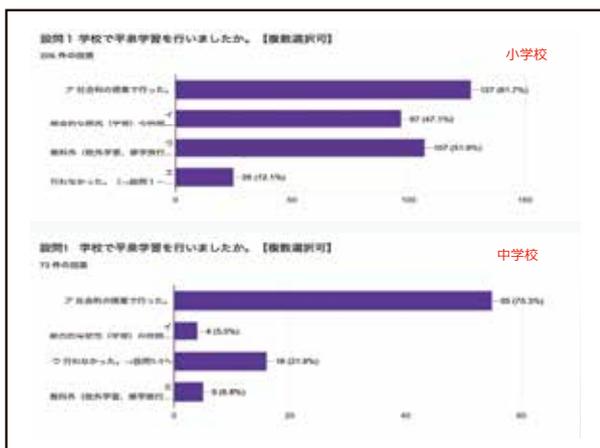
- ・世界遺産教育「平泉」のデジタル教材を開発するとともに、ICT環境のなかで活用できる、新たな学習モデルを提案し、世界遺産教育の革新はかろうとするもの

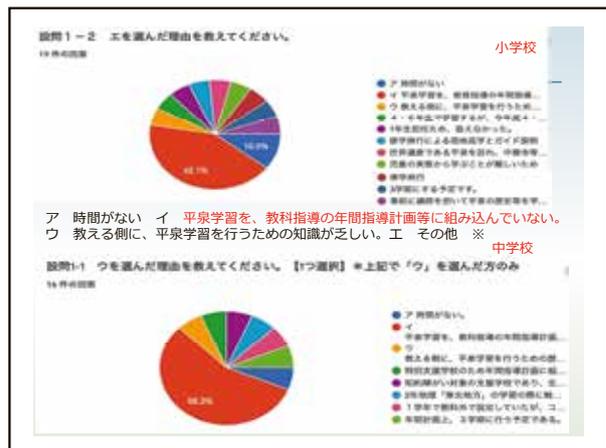
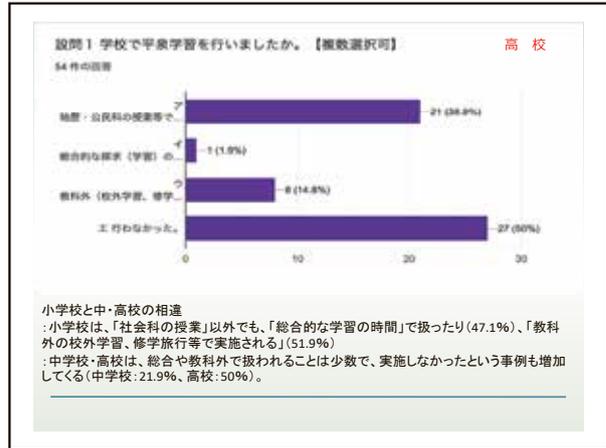
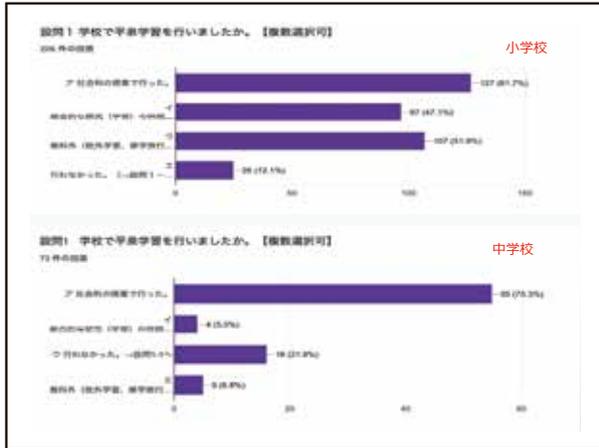
□研究期間

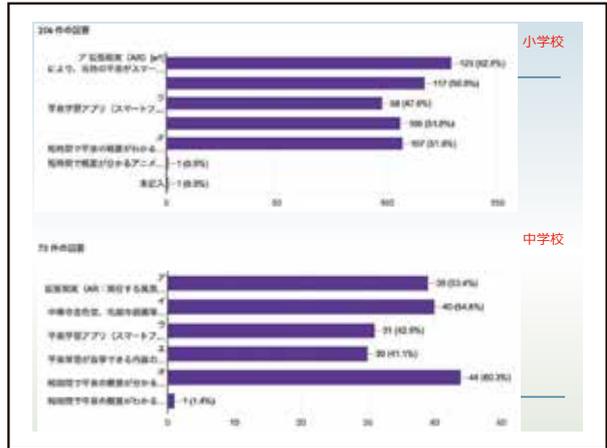
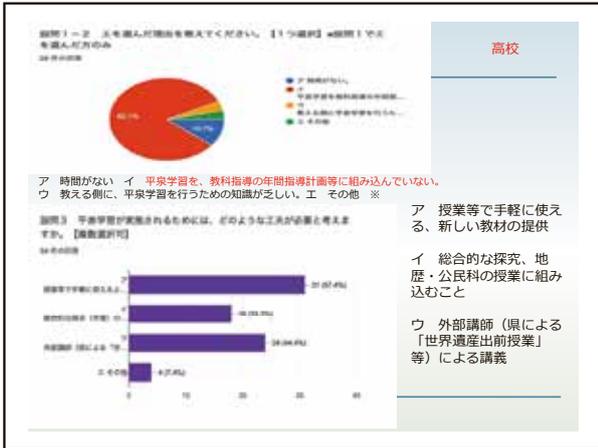
- ・令和2（2020）年度から令和6（2024）年度

□研究計画

- ・当初は、全国各地の世界遺産教育について、デジタル教材とICT教育に関して実態調査を実施する（先進的な実践事例の収集など）







今後の課題と方向性-1-

□小学校から高校まで、一貫したねらいのもとで、学習モデルを提案すること

→校種に応じて、年間指導計画に位置づけることができるようなもの

→具体的な教材とともに、提起されるべきであろう

→中学校・高校では、「平泉学習」をおこなう条件が揃っていないのか？

→中学校『社会』2021年全面実施
：「身近な地域の歴史」

→高校『日本史探究』2022年から年次進行
：「地域社会の歴史と文化」

これらが切り拓く可能性は？

今後の課題と方向性 - 2 -

□ 中学校「身近地域の歴史」の可能性

『中学校学習指導要領』社会 2021年全面実施
歴史的分野の内容A「歴史との対話」

(2)身近な地域の歴史

自らが生活する地域や受け継がれてきた伝統や文化への関心をもって、具体的な事柄との関わりの中で、**地域の歴史**について調べたり、...../**身近な地域の歴史的な特徴**を多面的・多角的に考察し、表現すること...

□ 高校『日本史探究』「地域社会の歴史と文化」

『高等学校学習指導要領』地理歴史 2022年学年進行
地域社会の歴史と文化について扱うようにする
＜解説＞**東北・北海道などからの視点**や**沖縄・九州などからの視点**で歴史を見たり... 歴史を地域的な多面性で捉える...

実践例① 平泉の歴史的価値を考える

時	学習内容と展開の概要
1	金色堂の修復 ・「NHKプロジェクトX 金色堂大修理」を視聴し、金色堂の価値についてまとめる。
2	奥州藤原氏の豊かさ ・大量の「かわらけ」の出土から、当時平泉が京都、博多に並ぶ都市であったことを理解する。 ・都の仏師と藤原基衡のやり取りから、奥州藤原氏の豊かさを読み取る。
3	平泉の国際性 ・中国産白磁、瀝美焼・常滑焼などの出土品から、平泉が当時の日本を代表する消費都市であったことを考える。 ・中国産の白磁が出土した事実をもとに、平泉が「海のシルクロード」の東の終着点であった可能性について考える。
4	平泉の価値についてのまとめ ・3時間の学習を通して学んだことをもとに、平泉の価値についてまとめる。

史料『吾妻鏡』文治5年9月17日条「寺塔已下注文」

「本実践では、そうした最新の研究成果を踏まえて、その建築物や出土物を丁寧に読み取ることによって、平泉の歴史的価値を明らかにしていきたいと考えた。」(上田淳梧論考)

今後の課題と方向性 - 4 -

□ 校種ごとの「平泉学習」 その深め方 視点

- 「東北・北海道などからの視点や沖縄・九州などからの視点で歴史を見たり... 歴史を地域的な多面性で捉える」高等学校学習指導要領
- さまざまな時代ごとに「地域の史料から教科書の記述を深めていくような方法は、その際の一つの方向性を示している」
- 「地域の新たな歴史教材」をどのように開発し、豊かな内実をつくっていくのか、そうした課題をきちんと受けとめることが求められている(拙稿)
- 高校 例えば 中世「陸奥国骨寺村絵図」 荘園絵図を読む 現代「柳之御所保存運動」文化財と私たち 「保存運動が同時に歴史研究でもある」(大石直正)

今後の課題と方向性 - 5 -

□ 校種ごとの「平泉学習」 その深め方 デジタル

- 小学校：平泉との物理的距離や予算的な問題から、平泉に赴いて体験学習が難しい学校もある
- 小・中・高校：時間的な制約のなかで、新たなデジタル・コンテンツ、特にARやVRを活用することはひとつの方向性を示す
- 「学びの改革プロジェクト」(岩手県)
 - ICT(情報通信技術)やVRを活用し、一人ひとりの能力や特性に応じた学習指導の充実、遠隔教育の普及、新たな学びの体験の創出を唱ったもの

Ⅱ 平泉文化の総合的研究基本計画 (第3期)

令和2年5月

岩手県・岩手県教育委員会

1 平泉文化研究の経緯

（1）研究基本資料の蓄積

平泉は12世紀末に奥州藤原氏が滅亡し、その後大規模な開発や災害を免れたため、いわゆる「平泉文化」を構成した文化財等は、現在でも良好に伝えられている。そのため、「平泉文化」を解明するための資料として、建造物、仏像を始めとする仏教美術資料、当時の記録類などの文献資料、陶磁器や建物遺構などの考古資料などがあり、現在に至るまで、多角的な観点から学術研究が進められてきた。

各種研究の中でも、『中尊寺と藤原四代 中尊寺学術調査報告』（1950）や『無量光院跡』（1954）、『国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書』（1968）、『奥州藤原史料』（1959）、『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』（1961）などは、昭和年間を代表する基礎資料となっており、岩手県教育委員会においても『奥州平泉文書』（1958）の刊行や、柳之御所遺跡の発掘調査を継続して実施するなど、文化財の保護と学術情報の提供を行ってきたところである。

しかし、研究体制については、あるテーマのもとに臨時的に組織編成されるにとどまっていたため、この段階では研究の多くを研究者の個人的努力に依存していたともいえ、発掘調査がほぼ寺社境内に限られていた段階では、平泉文化研究の題材が、仏教美術や文献史料に偏る状況にあった。

（2）平泉研究への関心の高揚

昭和63（1988）年に始まった、北上川一関遊水地事業及び国道4号平泉バイパス建設事業に伴う柳之御所遺跡の緊急発掘調査は対象地が約5万㎡と、それまで平泉町内で行われてきた発掘調査と比較して格段に広い面積であったばかりでなく、得られた調査成果も従来の認識を大きく変えるものとなった。

この結果、「平泉文化」に対する考古学・歴史学界の認識が飛躍的に高まるとともに、中尊寺が行った柳之御所遺跡の保存に向けた署名が20万人分を超えるものとなり、平泉が多くの人々の関心を集めることとなった。この段階では、財団法人（現：公益財団法人）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会の平泉町文化財センター（現：平泉文化遺産センター）が、「平泉文化」の考古学的研究に非常に大きな役割を果たした。

しかし、両組織は、開発行為等でやむを得ず消滅する遺跡の記録保存を行う発掘調査が主体であったため、学術的な課題への対応という点では、調査体制や継続性が保証されているものではなかった。

（3）研究機関整備に向けた動き

岩手県教育委員会では、柳之御所遺跡をはじめとする平泉遺跡群が一級の学術資料を提供する素材であり、それらの発掘調査によって得られた成果を、組織的・体系的・継続的に県民等に還元していく必要性を強く認識することとなった。一方で、体系的に「平泉文化」を研究している機関は、国、県等を含めても存在しなかった。

このため、平成5（1993）年には「歴史的文化遺産の活用に関する懇談会」を開催し、学術機関の必要性について討論が行われた。さらに、平成6（1994）年に「考古学研究機関の整備に係る調査研究協力者会議」を立ち上げ、考古学研究機関設置の検討に着手し、「平泉文化研究機関整備基本構想」を策定した。この構想では、先端的な研究を行っていくために、考古学的方法を軸として関連する諸科学が連携した学際的方法、及び「平泉文化」を単なる一地方史としてではなく、より広くアジア的な視点から国際的に捉えていく必要性について強調された。

2 平泉文化研究の推進

(1) 第1期～第2期研究計画の概要

「平泉文化研究機関整備基本構想」を策定後、考古学研究機関設置に係る基本計画策定の準備を進めたものの、研究機関の設置に先行して、研究の核である発掘調査による基礎資料の蓄積や、平泉文化の研究者による全国的なネットワークの形成、若手研究者の人材育成などが急務とされた。

この課題を受けて、平成12（2000）年から10カ年計画による「平泉文化研究機関整備推進事業」に基づき、「12世紀東アジアにおける平泉文化の意義」を主要テーマに据えた研究計画（以下、「第1期研究計画」）を推進し、考古学を主とした平泉文化について、岩手県と外部研究者との共同研究を骨格として、その成果を「平泉文化フォーラム」及び「平泉文化研究年報」により公開することとした。

また、第1期研究計画の途上となる平成13（2001）年に、「平泉の文化遺産」がユネスコ世界遺産暫定リストに登載されたことから、当初設定したテーマは時宜を得たものとなった。

平成22（2010）年からは、第1期研究計画の成果と課題を踏まえた第2期10カ年計画として、「平泉文化の総合的研究基本計画」（以下、「第2期研究計画」）を策定し、引き続き研究を推進した。

平成23（2011）年6月には、「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡－」として、世界遺産委員会において世界文化遺産への登録が決議された。

しかし、柳之御所遺跡を始めいくつかの遺跡については、世界遺産としての価値証明に至っておらず、更なる研究が必要とされたことから、本研究計画の途中から「世界遺産平泉」に係る研究テーマを追加することとなった。

各期における主な研究テーマと研究内容は以下のとおりである。

(2) 第1期研究計画：平成12（2000）年度～平成21（2009）年度

平泉文化研究機関整備推進事業「12世紀東アジアにおける平泉文化の意義」

【目標】

- ・ 平泉遺跡群の発掘調査成果の蓄積
- ・ 平泉研究者のネットワーク構築
- ・ 若手研究者の人材育成
- ・ 大テーマ：「12世紀東アジアにおける平泉文化の意義」
- ・ 小テーマ：3年ごとにサブテーマを設定、最終年度に総括シンポジウムを開催
 - ① 都市平泉の構造と平泉藤原氏の支配基盤
 - ② 世界遺産としての平泉文化
 - ③ 国家と異民族の関係性

【経過】

- ・ H12（2000）～H14（2002） 都市平泉の構造と平泉藤原氏の支配基盤
- ・ H15（2003）～H17（2005） 世界遺産としての平泉文化
- ・ H18（2006）～H20（2008） 国家と異民族の関係性
- ・ H21（2009） 研究の総括

**(3) 第2期研究計画：平成22（2010）年度～令和元（2019）年度
平泉文化研究機関整備推進事業「平泉文化の総合的研究基本計画」**

【新たな枠組】

- ・ 県内5大学で構成される「いわて高等教育コンソーシアム」との連携研究
（構成大学：岩手大学・岩手県立大学・岩手医科大学・盛岡大学・富士大学）
- ・ 岩手大学平泉文化研究センター研究サテライトを平泉遺跡群調査事務所に設置

【概要】

- ・ 大テーマ：「平泉文化の総合的研究基本計画」
- ・ 小テーマ：以下のとおり
 - ① 柳之御所遺跡の考古学的研究
 - ② 宗教・思想と国際性
 - ③ 都市と景観
 - ④ 文学と伝承
 - ⑤ 文献史料の基礎的考察
 - ⑥ 世界遺産に関する研究（平成25（2013）年度から追加されたテーマ）
- ※ ⑥のテーマについては、世界遺産登録推進事業「平泉の文化遺産拡張登録に係る5カ年研究計画」に基づき、当初の研究計画に追加して取り組むこととなったもの。

【世界遺産に係る研究】

- ・ 平成25（2013）年度～平成29（2017）年度
世界遺産登録推進事業による「平泉の文化遺産拡張登録に係る5カ年の研究計画」が策定され、世界遺産に係る共同研究を実施。
- ・ 平成29（2017）年度～令和元（2019）年度
上記事業による「柳之御所遺跡検討会（平泉の仏教的理想空間に係る国際研究会）」を開催。

3 平泉文化の総合的研究基本計画（第3期）について

(1) 期間の設定

令和2（2020）年度から令和6（2024）年度に実施する、「平泉文化の総合的研究基本計画」（第3期）（以下、「第3期研究計画」）は、従来の10カ年計画ではなく5カ年の計画で進めていくこととしたものである。

5カ年計画とした理由としては、これまでの研究計画が10カ年ごとに大小のテーマを設定し、長期的な視点に基づいて研究に取り組んできたものの、世界遺産登録に係る情勢の変化が著しいことから、計画の柔軟性と機動性を重視したことによるものである。また、平泉の世界遺産の拡張登録を見据え、より短期的な研究成果が求められていることも理由として挙げられる。

(2) 研究テーマの設定

第3期研究計画のテーマ設定にあたっては、第2期研究計画までの成果と課題を踏まえ、大きく5つのテーマを設定した。第2期研究計画で設定した6つのテーマのうち、「③都市と景観」、「④文学と伝承」は一定の研究成果を上げた一方、他の4つのテーマについては、研究の進展により新たな課題が提起された部分もあることから、引き続き発展的な要素も含めた研究テーマとして実施していくこととしたものである。

以下の表は、第2期研究計画のテーマと成果・課題、及びそれを受けての第3期研究計画の個別テーマをまとめた。

○ 第2期研究計画と第3期研究計画のテーマ整理表

第2期研究計画のテーマ（H22～R1：10カ年）			第3期研究計画のテーマ（R2～R6：5カ年）
研究テーマ	成果	課題	
① 柳之御所遺跡の考古学的研究	○ 堀内部地区の内容が解明された	● <u>堀外部地区</u> の解明が必要	① 柳之御所遺跡の考古学的研究
② 宗教・思想と国際性	○ 中国の都市との比較検討により、平泉の固有性が確認された	● <u>平泉と彼岸・此岸との関係性を深める</u> 研究が必要	② 平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究
③ 都市と景観	○ 独特の都市的領域として確認された ○ 浄土思想を反映した景観形成が確認された	○ <u>一定の成果</u> が得られたことから <u>終了</u>	/
④ 文学と伝承	○ 奥州の歌枕・西行の文学的研究が進んだ		
⑤ 文献資料の基礎的考察	○ 柳之御所遺跡出土文字資料の一部が解読された	● <u>未解読の文字資料</u> の解読、内容検討が必要	③ 出土文字資料の集成的研究
⑥ 世界遺産に関する研究	○ 平泉と北アジアの拠点が検討された	● <u>仏教遺産、都市造営の比較検討</u> が必要	④ 東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究
		● <u>新たに世界遺産に係る保存管理の人材育成</u> が必要	⑤ 学校教育における世界遺産の教材化についての研究

※ 世界遺産の拡張登録と直接関連する第3期研究テーマ：No①、②、④

第3期研究計画の研究テーマについては、今後更なる成果が見込まれるこれまでの研究テーマを継続するほか、第5回「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会「世界のなかの平泉」（平成29（2017）年8月）において、「アジアの都市史上における世界遺産としての価値証明を確実にするための比較研究が必要である」と指摘されたことや、世界遺産に係る保存管理の人材育成、世界遺産教育に係る新たな教材の開発が必要であるとの認識から、5つのテーマを設定することとした。

(3) 県等の予算事業名

- ・ 平泉文化研究機関整備推進事業
- ・ 世界遺産登録推進事業
(以上、岩手県)
- ・ 「世界遺産平泉」保存活用推進事業
(以上、「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会)

（4）研究テーマと共同研究者

- ・（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター → 研究テーマNo.①
- ・国等の研究機関（東京文化財研究所・奈良文化財研究所等） → 研究テーマNo.②・③
- ・岩手大学（平泉文化研究センター） → 研究テーマNo.④・⑤

No.	第3期研究計画のテーマ	共同研究者
①	柳之御所遺跡の考古学的研究 (堀内部地区と堀外部地区との関係性)	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターとの発掘調査
②	平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究	国等の研究機関研究者との共同研究 (世界遺産登録推進事業との連携)
③	出土文字資料の集成的研究	
④	東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究	岩手大学との共同研究
⑤	学校教育における世界遺産の教材化についての研究	

（5）研究テーマごとの研究目的・目標及び研究の実施方法

テーマ①：「柳之御所遺跡の考古学的研究」（堀内部地区と堀外部地区との関係性）

【研究目的・目標】

- ・未調査が多い堀外部地区の様相を把握し、今後の整備の材料として蓄積
- ・堀外部地区の検討を行い、堀内部地区や他の遺跡との比較検討を実施
- ・道路跡、区画の検討を実施（遺構の変遷、様相等の検討）

【研究の実施方法】

- ・平泉遺跡群調査整備指導委員会の指導に基づく調査を実施
- ・「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）（以下、「ガイダンス施設」）を研究施設として活用

テーマ②：「平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究」

【研究目的・目標】

- ・12世紀平泉の実態の解明
- ・「平泉」及び東、北アジアの彼岸・此岸の観点に基づく政治拠点との比較研究
- ・「平泉」の顕著な普遍的価値（OUV）の検証

【研究の実施方法】

- ・国等の外部研究機関研究者による、現地滞在も含めた共同研究の実施
- ・国の研究機関等との学術的な連携
- ・ガイダンス施設を研究施設として活用

テーマ③：「出土文字資料の集成的研究」

【研究目的・目標】

- ・柳之御所遺跡の出土文字資料の整理・読解・内容検討
- ・12世紀の国内出土事例を収集し、平泉の政治・文化・宗教の諸相を復元

【研究の実施方法】

- ・ 国等の外部研究機関研究者による、現地滞在も含めた共同研究の実施
- ・ 先端的科学機器を用いた文字資料の解読
- ・ 国の研究機関等との学術的な連携
- ・ ガイダンス施設を研究施設として活用

テーマ④：「東・北アジアにおける政治拠点と平泉との比較研究」**【研究目的・目標】**

- ・ 東・北アジアにおける前近代の政治都市（拠点）の成立過程を検討し、12世紀における「平泉」との比較研究
- ・ 政治と行政拠点としての「平泉」が、東・北アジアにおいて独特の位置にあることを追究

【研究の実施方法】

- ・ 東・北アジアにおける前近代政治都市（拠点）の成立過程を調査
- ・ 日本列島の近世以前における政治都市（拠点）の成立過程を調査
- ・ 政治拠点「平泉」の成立過程の調査
- ・ 「平泉」と他の政治都市（拠点）の比較に係るシンポジウムを開催

テーマ⑤：「学校教育における世界遺産の教材化についての研究」**【研究目的・目標】**

- ・ 世界遺産教育の具体的な実践事例の収集
- ・ 「平泉」における、よりよい世界遺産教育のあり方の検討と成果の実現（新規デジタル教材等の開発）
- ・ 世界遺産の保存管理に係る理解の深化、保存管理に係る若い世代の人材育成

【研究の実施方法】

- ・ 全国各地における世界遺産教育の実態調査
- ・ 岩手県内における「平泉」教育の実態調査
- ・ 世界遺産教育に係る課題の抽出、及び教育課程と世界遺産教育の関係整理
- ・ 「平泉」教育に係るワークショップの実施と関係教材（デジタル教材）の開発

(6) 研究の実践（『平泉学』とガイダンス施設）

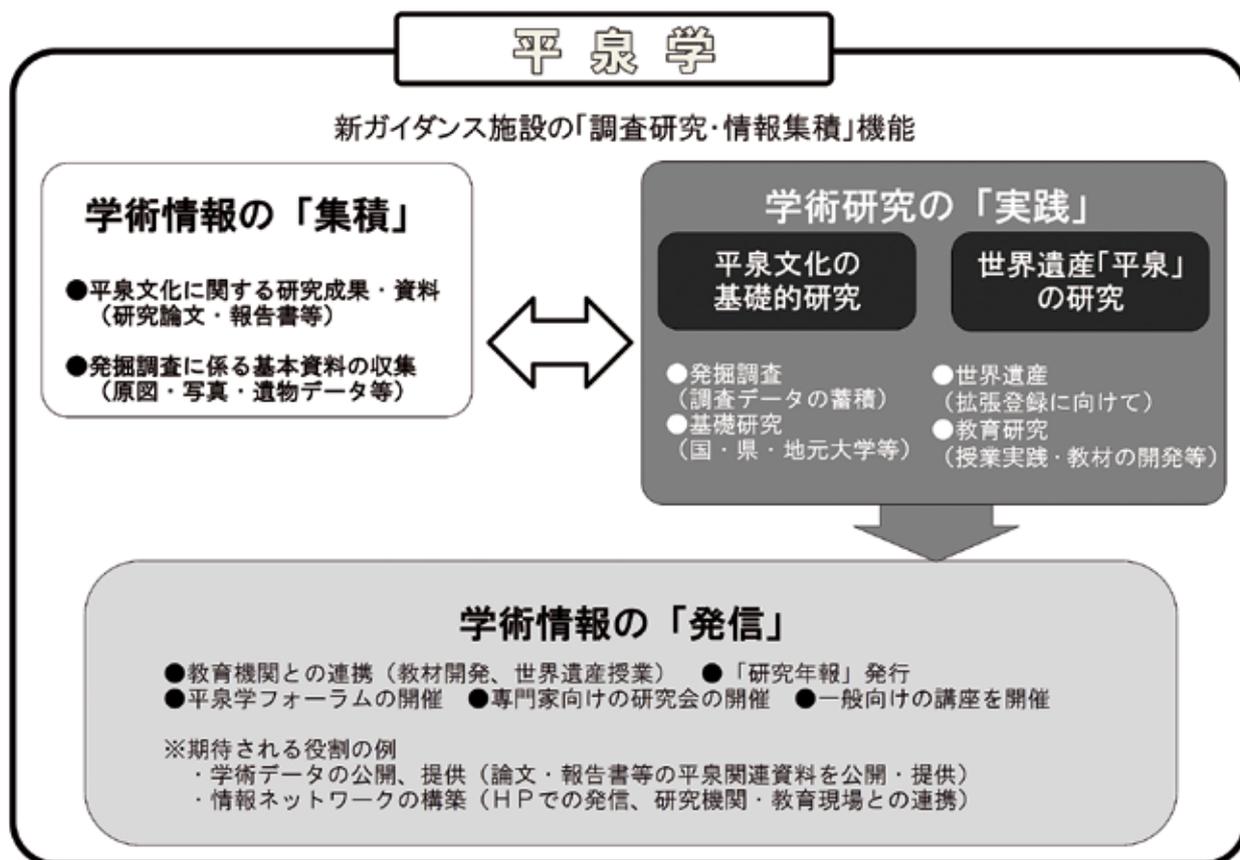
第3期研究計画については、令和3（2021）年度内に開設が予定されているガイダンス施設において、*『平泉学』（＝「平泉文化」に係る総合的な学術研究領域）を実践の柱として研究計画を進めていくものである。

ガイダンス施設の基本計画の中において、「平泉文化の多角的な調査・研究と研究者の交流の拠点として、学術情報が集積し活用される施設」と示されており、施設を研究の拠点として位置づけるとともに、学術研究を更に推進させていくこととしている。

また、国等の研究機関の研究者との共同研究を実施する理由として、将来的に国立博物館の誘致を目指しているところであり、その足掛かりとして平泉に国等の研究者に滞在していただきながら研究に取り組むことなどを想定している。

* 『平泉学』
 「平泉の文化遺産」をはじめとする情報発信力を強化するため、「平泉学」を軸とした学術研究に基づく情報発信等を充実します。（「いわて県民計画（2019～2028）」より）

○『平泉学』研究フレームのイメージ



(7) 成果の公開

研究の成果については、毎年度「平泉学研究会」、「平泉学フォーラム」、「研究年報」により公開・刊行する。主な実施内容は以下のとおりである。

① 「平泉学研究会」

研究者を対象とし専門性を高めた内容とする。研究計画の進捗により得られた成果の経過報告と、新たに生じた課題等に対して研究討議を行う。

② 「平泉学フォーラム」

平成12（2000）年度から開催されてきた「平泉文化フォーラム」を発展的に再編して実施する。一般県民向けを対象とするもので、より理解しやすい内容として開催する。

③ 「平泉文化研究年報」

平成12（2000）年度から刊行を重ねてきた『平泉文化研究年報』を継続・発展させるもので、県と岩手大学との研究成果を収録する。

④ 「平泉学研究年報」

令和2（2020）年度から、県と国研究機関等の研究者との研究成果を収録する。

4 今後に向けて

第3期研究計画の策定にあたっては、世界遺産の拡張登録を見据えた内容を研究テーマとして重点化し、ガイダンス施設を『平泉学』の研究拠点とすることによって、岩手県及び岩手県教育委員会が合同で実施することとしたものである。

設定した研究計画及び研究テーマについては、令和2（2020）年度から令和6（2024）年度までの5カ年による見通しを立ててはいるものの、研究の進展や情勢の変化等によっては、研究テーマの内容を一部見直す必要性が生じることも考えられる。

今後、他の研究機関等との連携による研究計画を進めながら、多くの研究者が平泉に集い、研究活動がより一層活性化して得られた成果によって、国際的な情報発信を行っていきたい。

令和2年度「第1回平泉学研究会」実施報告

- 1 日 時 令和3年2月6日（土）13：00～16：00
- 2 場 所 岩手大学理工学部「銀河ホール」
- 3 主 催 岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター、岩手県、岩手県教育委員会
- 4 対 象 研究者（事前に県内文化財関係担当者、世界遺産シンポジウム参加者、平泉関係研究者、過去3年間の共同研究者等を中心に招待メールを送信）
- 5 実施方法 岩手大学をハブとしたZOOMによりリモートで実施
- 6 日程・発表者
研究報告①『柳之御所遺跡の考古学的研究』
岩手県教育委員会（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 主任文化財専門員）北村忠昭
研究報告②『平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究』
国立文化財機構文化財防災センター 東京分室長 岡田 健
研究報告③『出土文字資料の集成的研究』
国立歴史民俗博物館 研究部教授 三上 喜孝
研究報告④『東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究』
岩手大学平泉文化研究センター教授 劉 海宇、教育学部教授 菅野 文夫
岩手県文化スポーツ部文化振興課 世界遺産担当 主任主査 戸根 貴之
- 7 参加者数 40名



令和2年度「第1回平泉学フォーラム」実施報告

- 1 日 時 令和3年2月7日（日）10：30～16：15
- 2 場 所 一関文化センター（中ホール）
- 3 主催・共催・後援
主 催 岩手県、岩手県教育委員会、岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター
「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会
共 催 一関市教育委員会、奥州市教育委員会、平泉町教育委員会
- 4 対 象 一般
- 5 実施方法 コロナウイルスの感染拡大により、会場は収容定員の半数（200名）に制限し、YouTubeによる動画の同時配信も合わせて実施。
- 6 日 程
基調講演 『「平泉」の世界遺産の価値を読み解く』 本中 眞（前内閣官房内閣参事官）
研究報告① 『柳之御所遺跡の考古学的研究』
岩手県教育委員会（（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）北村 忠昭
研究報告② 『平泉の彼岸と此岸の造形に係る比較研究』
国立文化財機構文化財防災センター 東京分室長 岡田 健
研究報告③ 『出土文字資料の集成的研究』
国立歴史民俗博物館 研究部教授 三上 喜孝
研究報告④ 『東・北アジアにおける政治拠点と平泉の比較研究』
岩手大学平泉文化研究センター教授 劉 海宇、岩手県教育委員会 大道 篤史
研究報告⑤ 『日本の学校教育における世界遺産の教材化についての研究』
岩手大学教育学部 教授 今野 日出晴
調査報告① 『骨寺村荘園遺跡の調査』
一関市教育委員会 菅原 孝明
調査報告② 『長者ヶ原廃寺跡の調査』
奥州市教育委員会 中島 康佑
調査報告③ 『志羅山遺跡の調査』
平泉町教育委員会 鈴木 博之
- 7 入 場 者 会場200名、動画視聴300名



平泉文化研究年報 第21号

令和3年3月31日

発行 岩手大学・岩手大学平泉文化研究センター
〒020-8550 岩手県盛岡市上田3-18-8
編集 岩手県教育委員会事務局 生涯学習文化財課
印刷 杜陵高速印刷株式会社
〒020-0811 岩手県盛岡市川目町23-2
TEL 019-651-2110

HIRAIZUMI BUNKA KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi Studies

Contents

Research themes

Comparative study on Hiraizumi's political bases in East and North Asia
; Spatial structure of Luoyang City in Sui-Tang Dynasties from a Buddhist point of view
LIU Haiyu

Comparative study of political bases and Hiraizumi in East and North Asia
; Town planning concept of Oshu Fujiwara clan and its influence
OMICHI Atsushi
TONE Takayuki

Research on the world heritage materials of Hiraizumi in school education
KONNO Hideharu

Research plan

The 3rd master plan of synthetic studies about Hiraizumi culture
Iwate Prefectural Government and Iwate Prefectural Board of Education

Contents of the event

Report of the 1st meeting for Hiraizumi Studies

Report of the 1st Forum for Hiraizumi Studies

Iwate University and Iwate University Center for Hiraizumi Studies

3-18-34 Ueda, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8550, Japan

Iwate Prefectural Government and Iwate Prefectural Board of Education

10-1 Uchimaru, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan